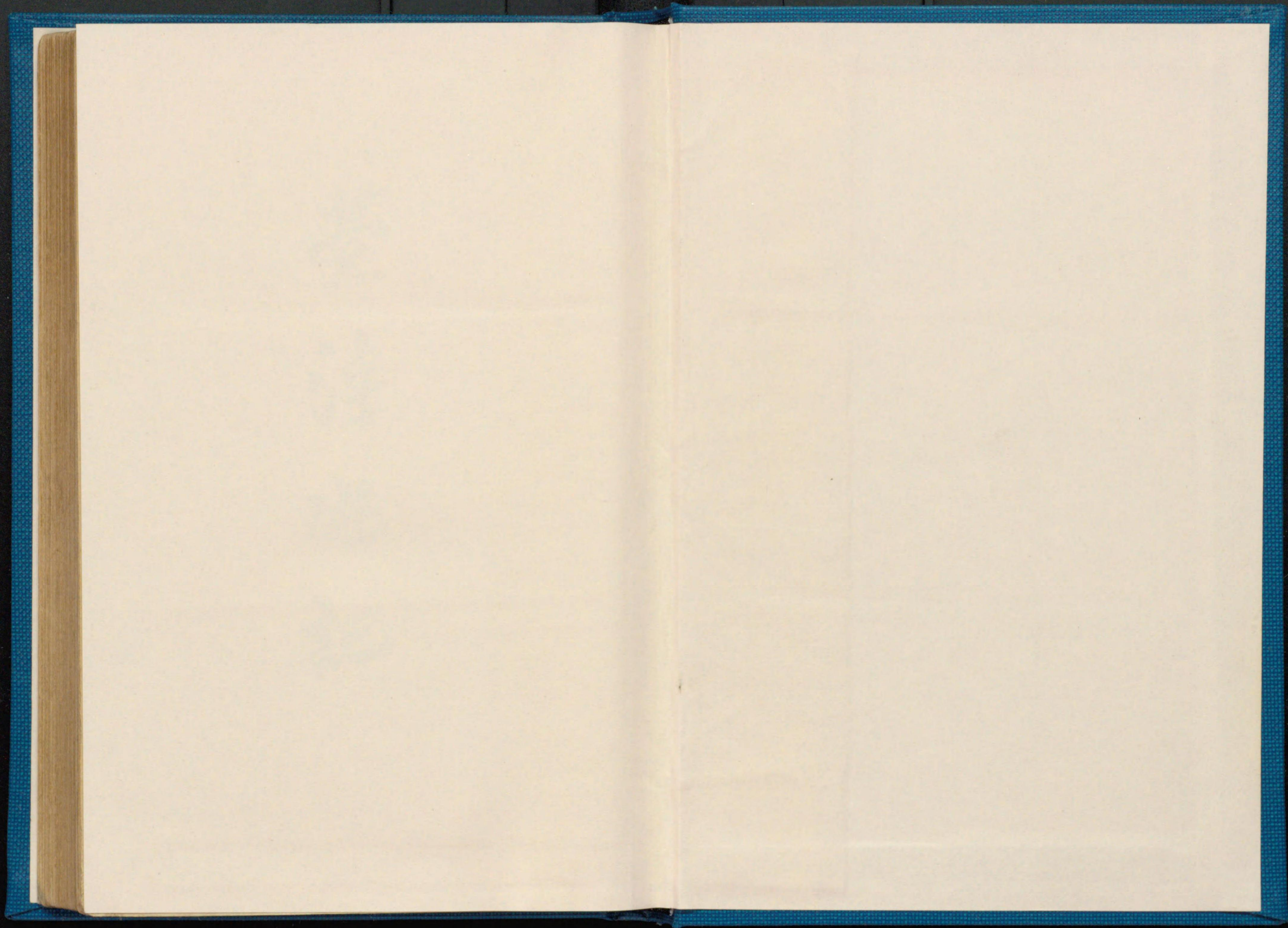


556-354



1200501511076





テト 2K-21



臺灣遊記



556-354

予は臺灣視察
ろ四十年來予
分的の國民新
んが爲めであ
是を以て遊ぶ
習的動物だ。
れない。予が
三月四日基隆

は
1
2
3



吉
成
七

芭蕉葉寒黃
此

雲深處
緋櫻
花

山中

靈泉

亦道
醫
方
瘦
人

行
玉
瓦

古
人
不
吾
欺

臺
址
山
邊
泉
石

英
年
六
十
七



蕉窗意
深處
中
靈泉湧
人生
人不吾欺
臺北山邊泉偏成
茲年二十七夏





昨非不可追明是

不可期擺脫是是非非

隨緣又隨時偶在

蓬萊東鳴南北極津

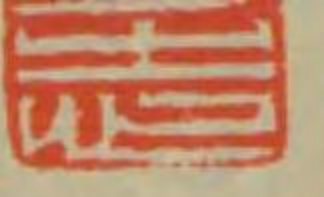
送迎有知友席上

無四時木瓜孰一果

芭蕉蜜意三山

5563

なる目的として、
予が扶輪、予の公生活



556-3

非不可追嗣是
 可期擺脫是非意
 緣又隨時偶來
 某鳩南北極津渡
 迎有知友密春
 四時木瓜瓜孰思
 舊家無三州山

なる目的として、
 予が扶輪し、予の公生活に取りて、不
 なる胸中の熱意を、此の旅行によりて

はしがき

予は臺灣視察を主なる目的として、臺灣に遊んだのではない。寧ろ四十年來予が創立し、予が扶植し、予の公生活に取りて、不可分の國民新聞を去りたる胸中の懊惱を、此の旅行によりて慰せんが爲めであつた。

* * * *

是を以て遊ぶを重しとして、學ぶを輕しとした。されど人間は學習的動物だ。如何に娛樂を務としても、自然に學ぶ所があるを免れない。予が臺灣に於ける一個月弱—昭和四年二月九日基隆著、三月四日基隆發—の旅行は、單に予の心身をして殆んど蘇生せし

はしがき

心通眼裏

めたるのみならず、その副産物としての得益も、決して鮮少ではなかつた。

* * * * *

臺灣に遊んで最も意外に感じたるは、(第一)現時に於ては、思つたよりも健康地である事。(第二)他の周到なる施設と比較して、本島内交通の不便なる事。(第三)内地人と本島人との間に於ける勢力が、餘りに不釣合である事。別言すれば、思つたよりも内地人の本島内に於ける經濟的勢力の扶植が不足である事。(第四)内地人が、何れも臺灣に落ち付き居るのは、感心するが。餘りに落ち付き過ぎて、創業有爲の氣分が、聊か鈍れつゝあるかの如く見

受けられたる事。(第五)臺灣總督政治が、即今行き詰りの姿であり、何とか局面打開の時期に差し迫りつゝある事。

* * * * *

予は臺灣占領に關する最初の發言者でなき迄も、其の一人である。而して臺灣のみならず、比律賓群島に就ても、三十年前聊か論じたる所がある。二十七八年戦役了るや、直ちに比律賓に關する一書を、民友社より刊行し、微意の存する所を、其の序文に掲げてゐる。然も世局幾變、今や當時の策論も、空しく昔物語の資料となり了つた。

* * * * *

臺灣に遊ぶ者は、往々利權漁者の仲間視せらる。但だ予は放浪雲水の客。巡遊中には、木瓜を飽喫し、歸囊には梓杖數竿を携へたるのみ。其の得益不少と云ふは、固より見聞のことのみ。

* * * * *

本書は唯だ其日くの見聞に上れる感想を、その日くく録したるもの。固より調査とか、觀察とか云ふ可き程のものではない。然も一般の讀者には、或は小補なきにしもあらずと信ずるが故に、之をその儘修整を加へずして、刊行するとした。而して別記は、予の臺灣見聞一斑を、某處にて講演したる筆記にして、固より自から訂正するに違あらず。然も尙ほ鷄肋の感あるを以て、

之を本書に附載するとした。

* * * * *

最後に予は臺灣總督府の諸官、及び臺灣に於ける内地本島の諸名流、及び特に熊本縣出身の郷友諸君に向つて、予等夫妻の臺灣旅行をして、愉快と利益とを兼ね得せしめたるを深謝せずして已む能はない。

昭和四年六月十九日 東京郊外大森山王草堂に於て

蘇 峰 迂 人

臺灣は小なれども、日本帝國の飛石である。
帝國の發展は、此の飛石から始らねばならぬ。

臺灣遊記目次

| | | |
|----|-----------|----|
| 一 | 臺灣と予 | 一 |
| 二 | 神戸から馬關 | 四 |
| 三 | 長府及び乃木神社 | 七 |
| 四 | 瑞穂丸船中 | 一〇 |
| 五 | 基隆より臺北 | 一三 |
| 六 | 臺灣神社 | 一六 |
| 七 | 臺北見物 | 一九 |
| 八 | 老新聞人の氣焔 | 二二 |
| 九 | 病友訪問、新店遊賞 | 二四 |
| 一〇 | 臺北圖書館 | 二七 |
| 一一 | 總督府及總督官邸 | 三〇 |

| | | |
|----|-----------|----|
| 一二 | 臺北醫院 | 三二 |
| 一三 | 臺北大學 | 三五 |
| 一四 | 桃園より大溪 | 三八 |
| 一五 | 大溪より角板山 | 四〇 |
| 一六 | 角板山の一夕 | 四三 |
| 一七 | 角板山より新竹 | 四五 |
| 一八 | 新竹より臺中 | 四八 |
| 一九 | 臺中見物 | 五二 |
| 二〇 | 臺中より埔里に向ふ | 五五 |
| 二一 | 日月潭 | 五八 |
| 二二 | 大林 | 六〇 |
| 二三 | 日月潭より二水驛 | 六三 |
| 二四 | 虎尾 | 六六 |

| | | |
|----|---------|-----|
| 二五 | 嘉義概観 | 六八 |
| 二六 | 阿里山に登る | 七一 |
| 二七 | 阿里山途上 | 七三 |
| 二八 | 阿里山概観 | 七七 |
| 二九 | 阿里山を下る | 八〇 |
| 三〇 | 嘉義より臺南 | 八二 |
| 三一 | 臺南見物 | 八五 |
| 三二 | 嘉南大圳 | 八八 |
| 三三 | 臺南より高雄 | 九一 |
| 三四 | 高雄より鶯巒鼻 | 九四 |
| 三五 | 四重溪 | 九七 |
| 三六 | 北上の途に就く | 九九 |
| 三七 | 屏東と鳳山 | 一〇二 |

目次

四

| | | |
|----|------------------------|-----|
| 三 | 高雄より鹿港…………… | 一〇五 |
| 三九 | 鹿港概観…………… | 一〇八 |
| 四〇 | 重ねて臺中に抵る…………… | 一一一 |
| 四一 | 林家の訪問…………… | 一一三 |
| 四二 | 淡水に向ふ…………… | 一一七 |
| 四三 | 草山雅集…………… | 一一九 |
| 四四 | 草山及其の附近…………… | 一二二 |
| 四五 | 芝山巖と和尚州…………… | 一二五 |
| 四六 | 澳底の北白川宮御上陸記念碑…………… | 一二九 |
| 四七 | 宜蘭…………… | 一三二 |
| 四八 | 礁溪より基隆を経て臺北に還る…………… | 一三四 |
| 四九 | 臺灣を去るに際し、若干の希望を語る…………… | 一三七 |
| 五〇 | 基隆に於ける顔氏邸の別宴…………… | 一四一 |

| | | |
|----|-----------------------|-----|
| 五一 | 蓬萊丸船中の安樂窩…………… | 一四四 |
| 五二 | 門司、馬關、別府…………… | 一四六 |
| 五三 | 別府より由布院を経て耶馬溪に至る…………… | 一五〇 |
| 五四 | 耶馬溪、羅漢寺、中津…………… | 一五三 |
| 五五 | 國東半島に遊ぶ(一)…………… | 一五六 |
| 五六 | 國東半島に遊ぶ(二)…………… | 一五九 |
| 五七 | 別府及び瀬戸内海…………… | 一六二 |
| 五八 | 大阪の風京都の雪…………… | 一六五 |
| 五九 | 濱寺の半日…………… | 一六七 |
| 六〇 | 雨雪中の山鼻…………… | 一七〇 |
| 六一 | 三夜莊の午餐…………… | 一七三 |
| 六二 | 身邊の變化…………… | 一七六 |
| | 臺灣占領の意見書…………… | 一八〇 |

目次

五

臺灣所見

目次

六

一 臺灣に就ての概念……………一八七

二 歴史上の臺灣……………一八八

三 和寇と鄭芝龍父子……………一九〇

四 豊臣秀吉と臺灣……………一九二

五 徳川家康と臺灣……………一九五

六 日本人の海外進出……………二〇〇

七 臺灣と鄭成功……………二〇二

八 彼理の來朝と臺灣……………二〇四

九 日本と臺灣との接觸……………二〇七

一〇 臺灣日本の領土に歸す……………二〇九

一一 支那統治中の臺灣……………二一一

一二 日本と比律賓群嶋……………二二四

一三 臺灣特殊の産物(一)……………二二六

 砂 糖

一四 臺灣特殊の産物(二)……………二二九

 米

一五 臺灣特殊の産物(三)……………二二三

 バナ、其他

一六 奇拔の養魚池……………二二六

一七 阿里山の森林……………二二八

一八 臺灣の生蕃に就て……………二三二

一九 在住の人種と生活状態……………二三七

二〇 北白川宮能久親王殿下の御事……………二四一

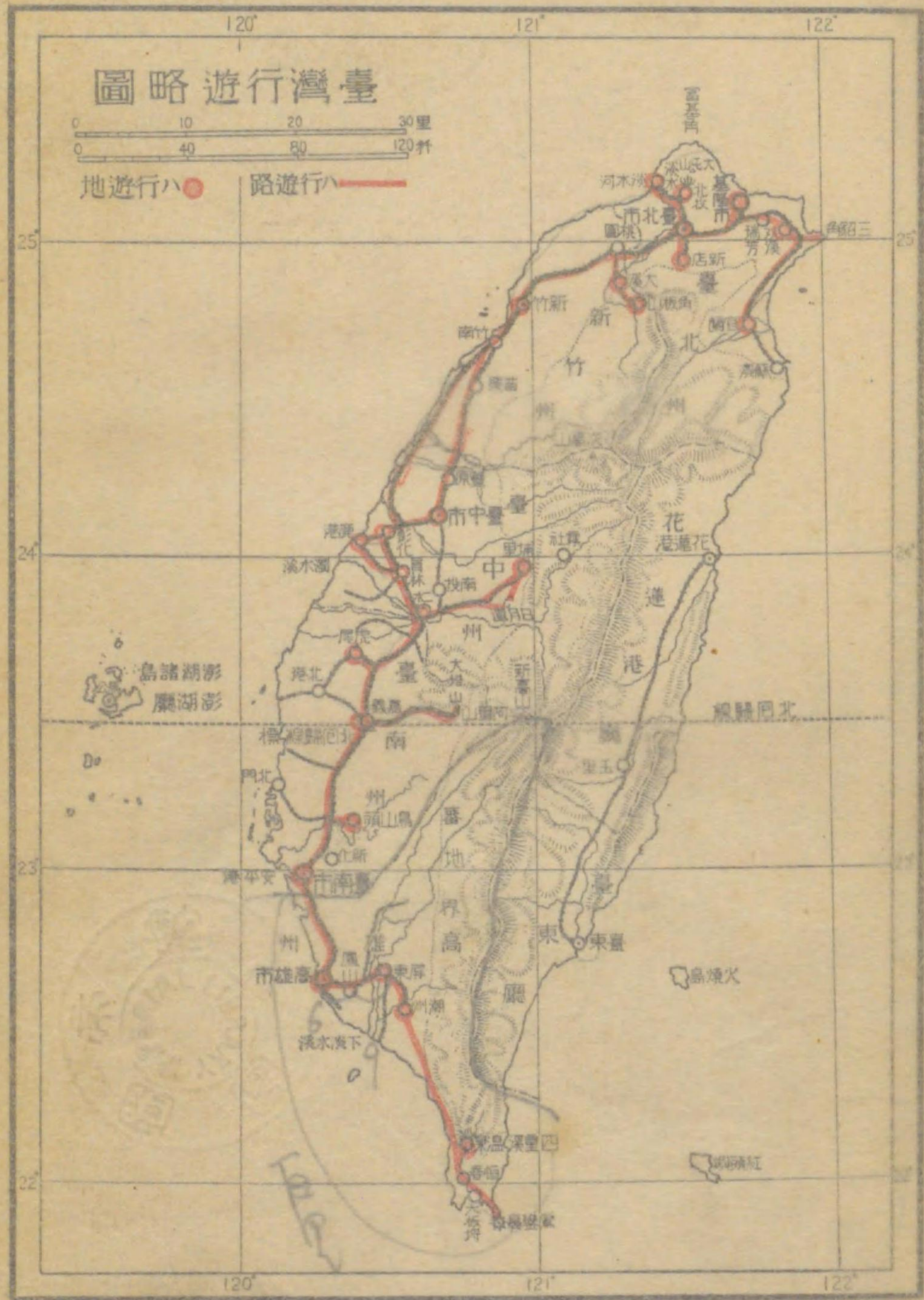
目次

七

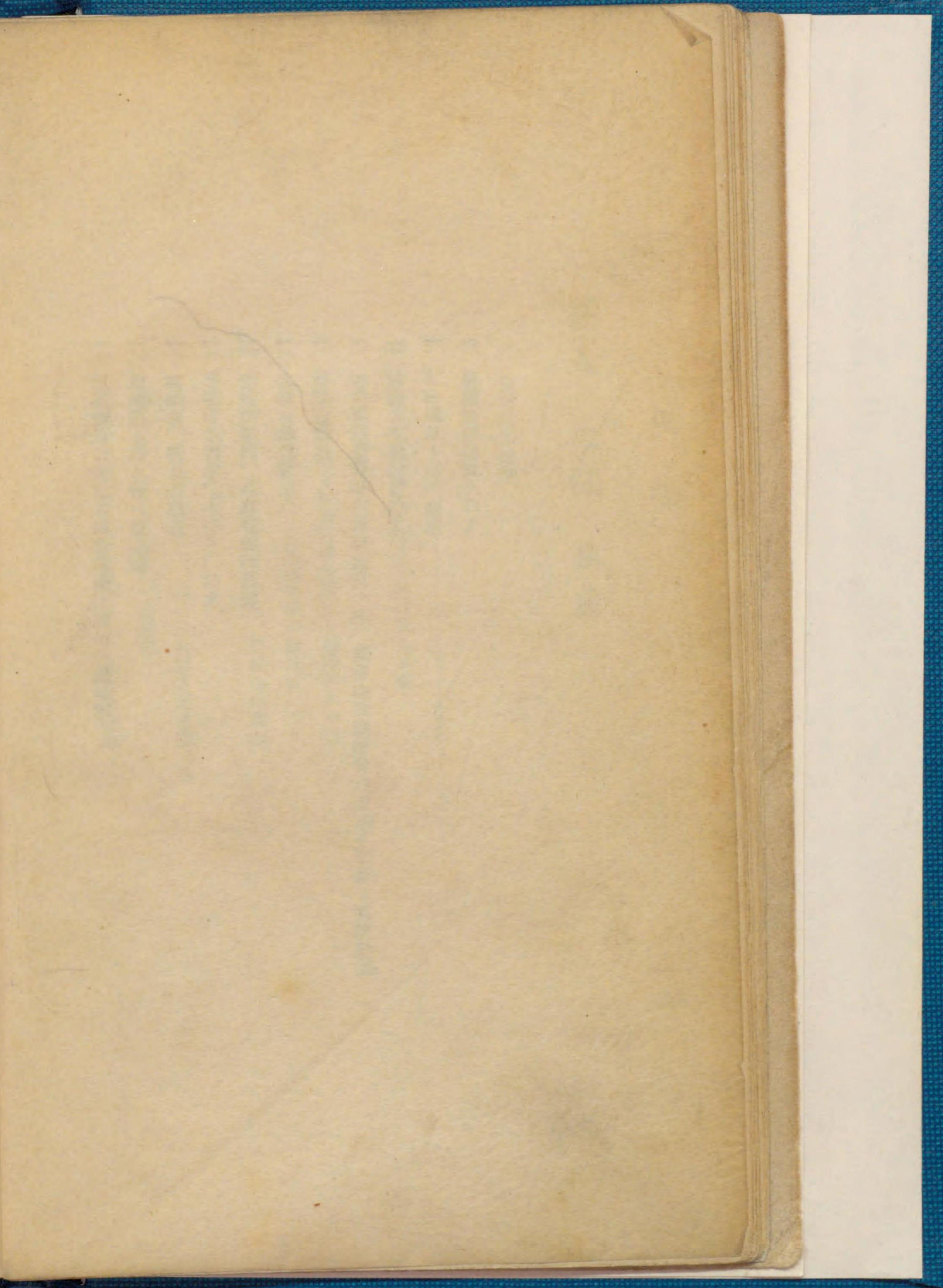
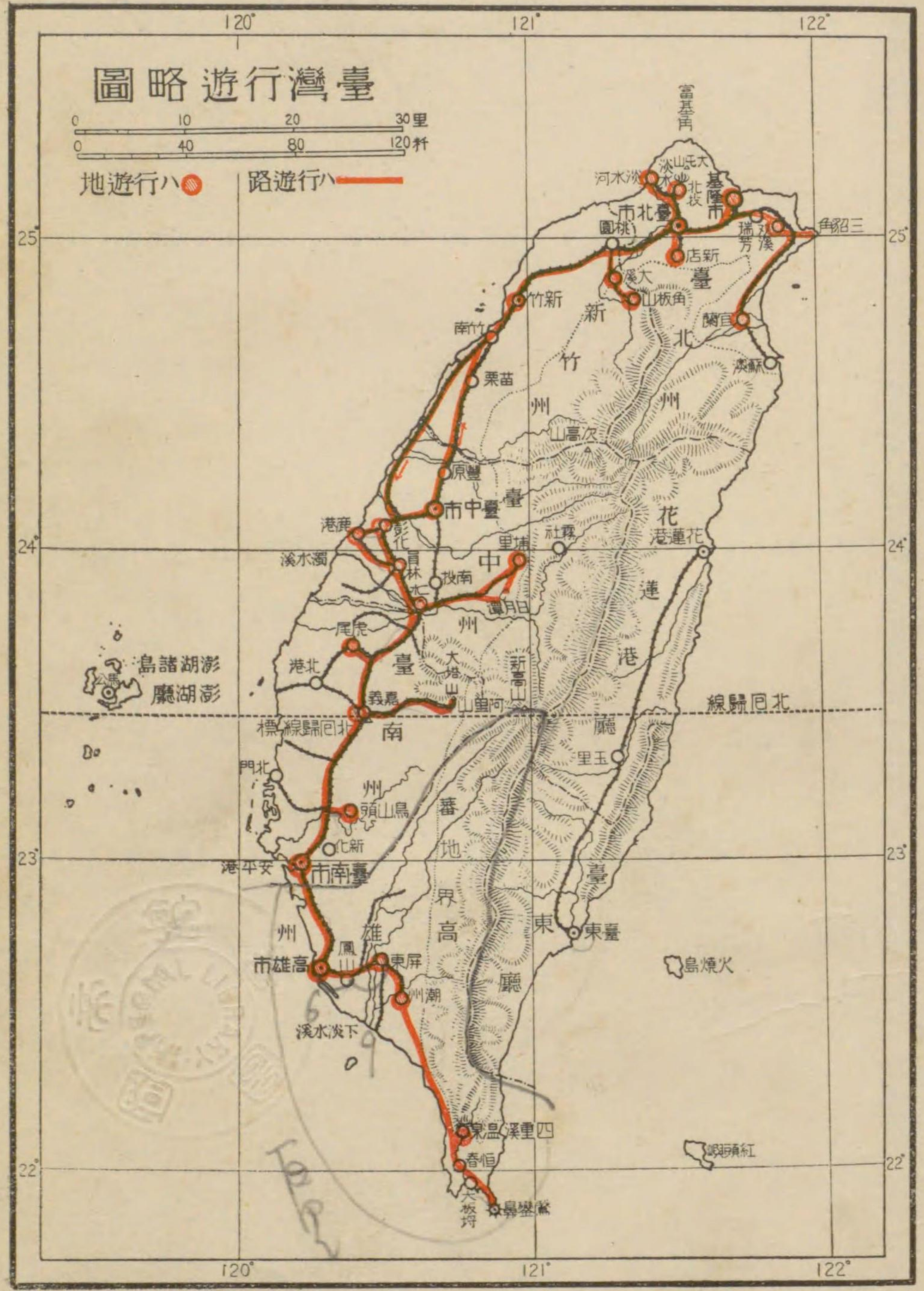
挿入 地圖 寫眞

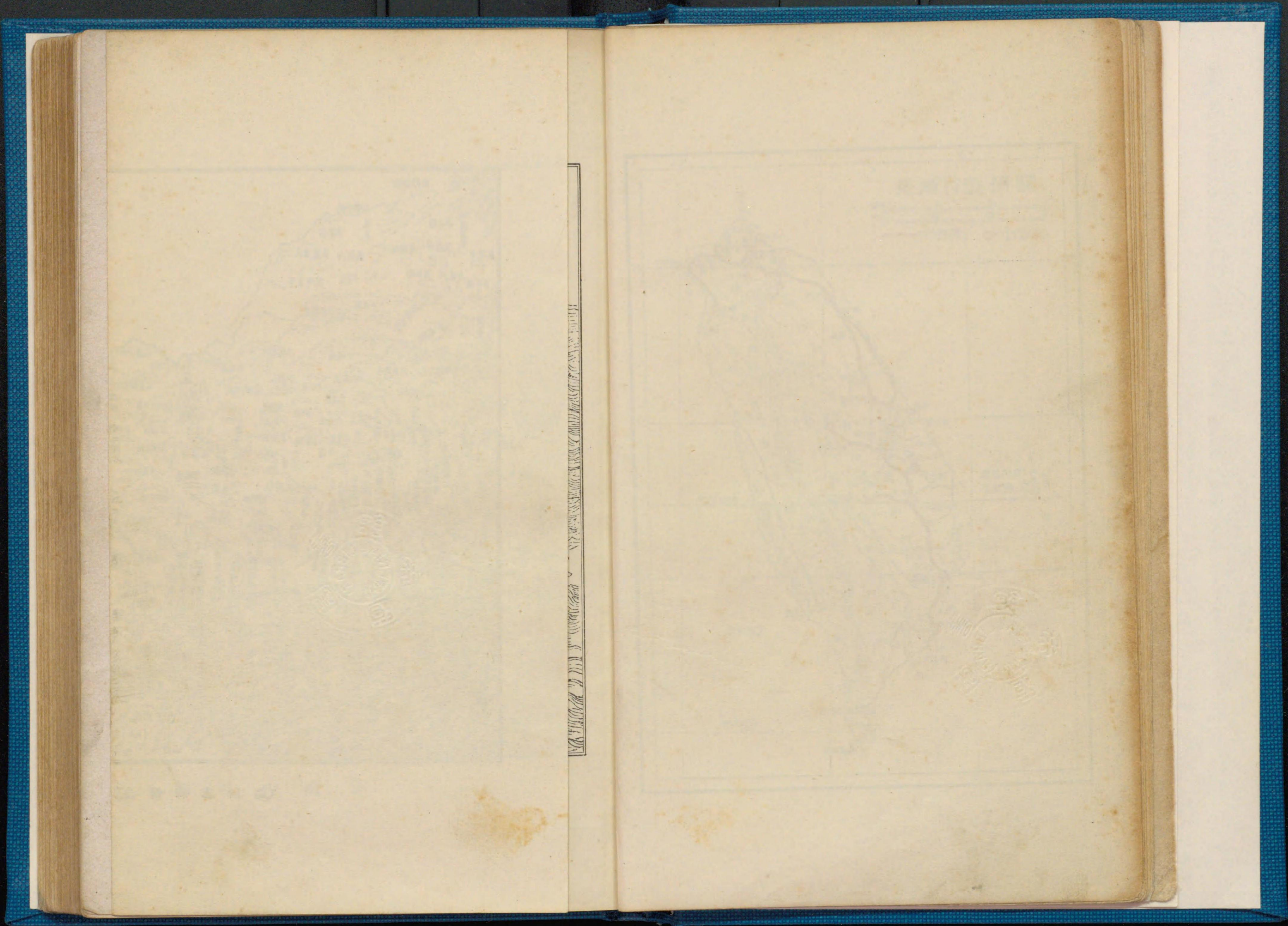
- 一 臺灣行遊略圖
- 一 臺灣古地圖
- 一 瑞穂丸と瑞穂丸甲板上の蘇峰學人夫妻
- 一 臺灣神社前にて
- 一 臺灣總督府と總督官邸に於ける蘇峰學人一行
- 一 臺北蓬萊園に於ける新聞記者の歡迎會
- 一 大溪に於ける有志諸君の歡迎、角板山の蕃社
- 一 角板山蕃童の作品
- 一 臺中松岡富雄氏邸にて、臺中に於ける熊本縣人會
- 一 埔里へ向ふ途上、埔里よりの歸途
- 一 日月潭へ向ふ途上、日月潭湖上、蕃婦の杵歌

- 一 虎尾神社に於ける記念植樹、鳳山の鳳梨園
- 一 虎尾熊本縣人會の歡迎辭
- 一 阿里山、塔山の斷崖
- 一 阿里山の神木、木登り、伐木
- 一 臺南の鹽田、高雄港内の竹筏
- 一 嘉南大圳にて
- 一 鷺鑾鼻燈臺
- 一 恒春車城庄統埔の琉球藩民の墓、同龜山西郷都督の上陸本營地と苦戰地跡
- 一 板橋林本源氏邸にて
- 一 草山溫泉と草山雅集
- 一 基隆顏國年氏邸にて



[This page contains faint, illegible ghosting of text from the reverse side of the book. The text is too light to transcribe accurately.]

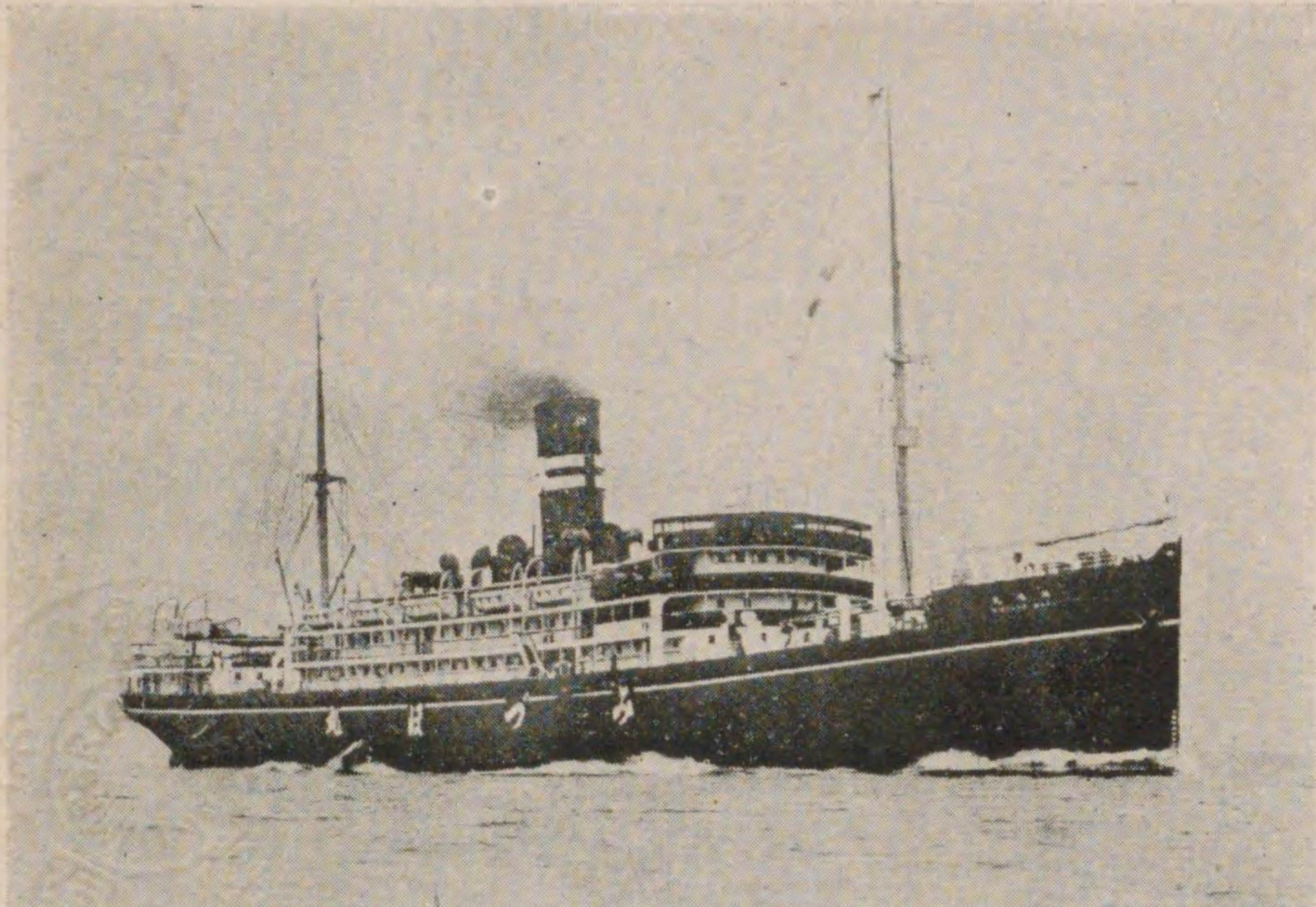






臺灣古地圖 (臺灣府志所揭)

丸 穗 瑞



妻夫人學峰蘇の上板甲丸穗瑞



てに前社神灣臺



府 督 總 灣 臺



行 一 人 學 峰 蘇 爾 け 於 に 邸 官 督 總

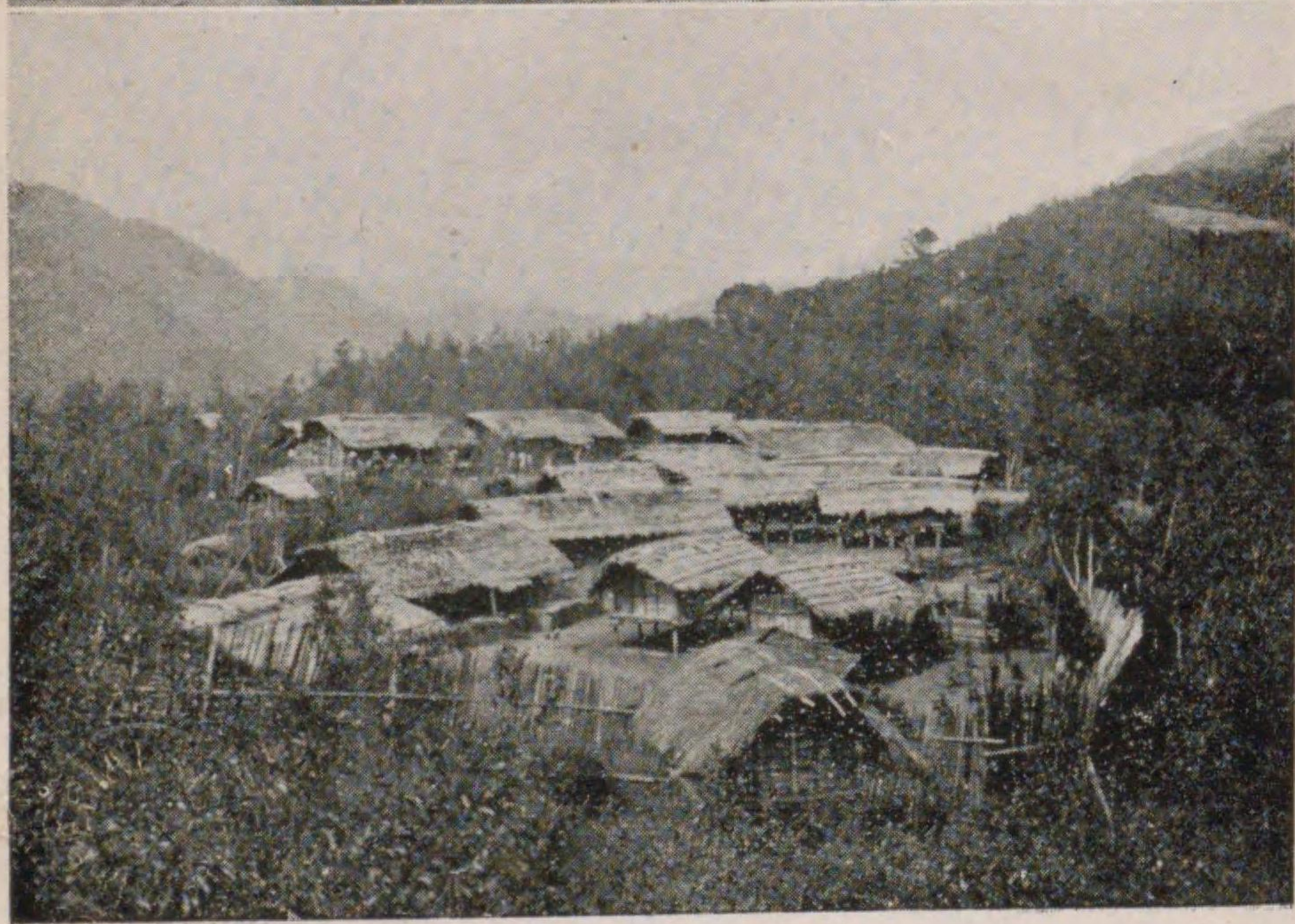




會迎歡の者記聞新るけ於に園萊蓬北豪



大溪に於ける有志諸君の歓迎



角板山の蕃社



昭和四年二月十三日

大溪郡角板山教育所

第三學年

男ロシシネン
十三才

今夜角板

山に着く

大溪郡角板山教育所

第四學年

男ホライケン
十五才

品作の童蕃山板角

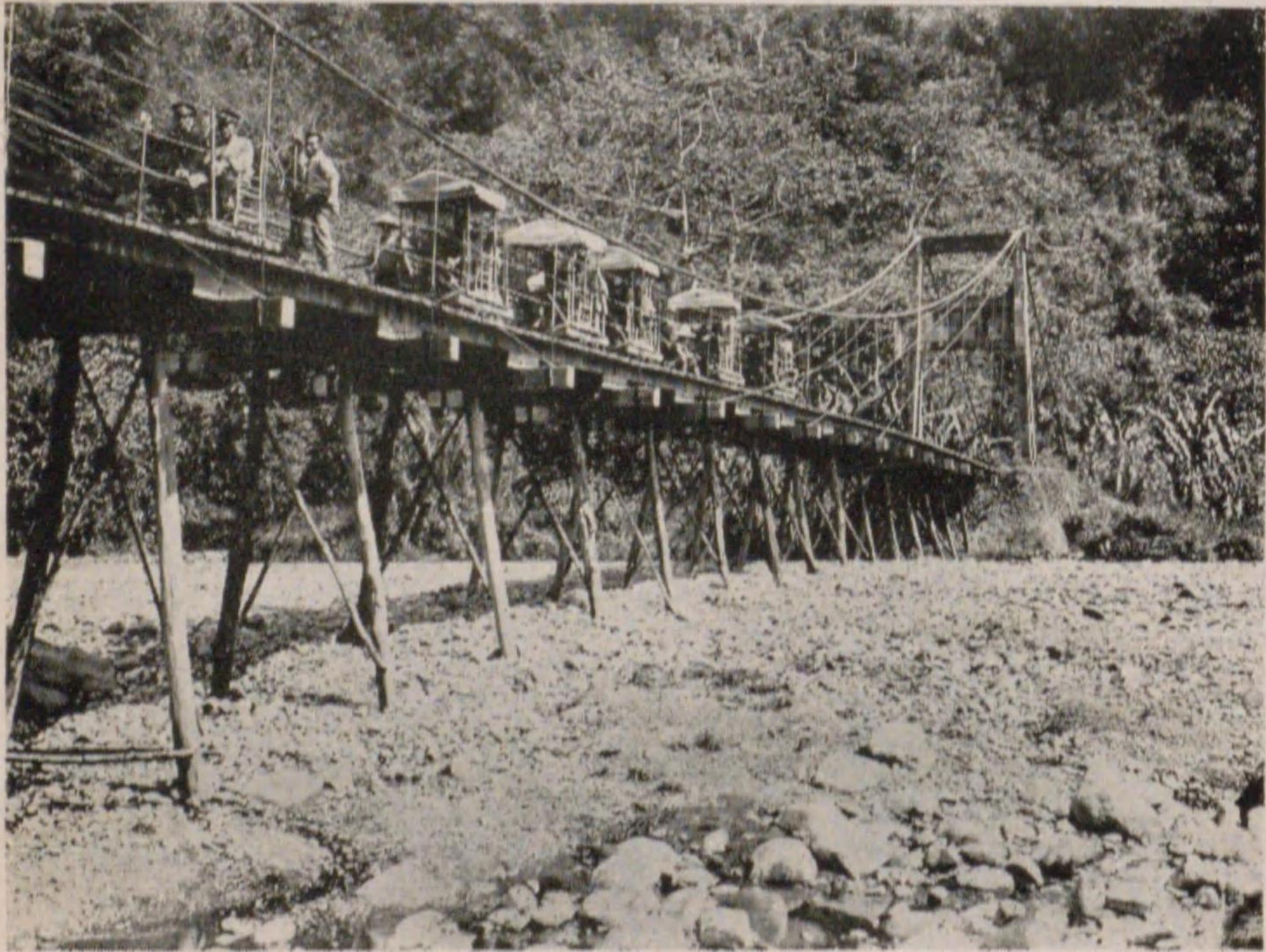
臺中松岡富雄氏に於て



臺中松岡富雄氏に於て



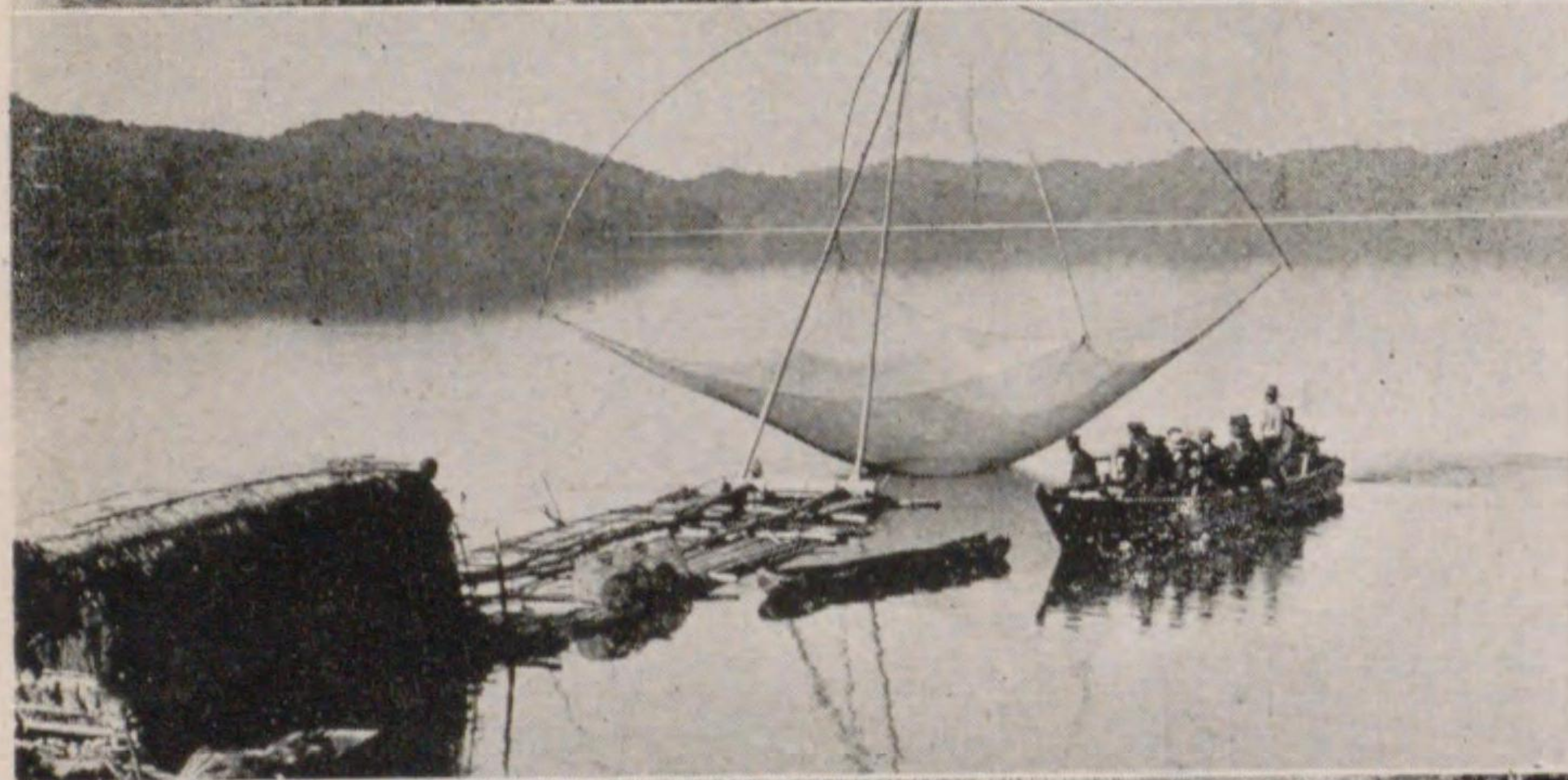
上 途 ぶ 向 へ 里 埔



途 歸 の り へ 里 埔

PHOTOGRAPHED BY
W. H. ...
1911

上途ふ向へ潭月日



(下) 歌杵の婦蕃

(中) 上湖潭月日



樹植念記るけ於に社神尾虎



園梨鳳の山鳳



歡迎之辭

論壇之獅を吼其人格ト相俟ツテ
能ク一世ノ木鐸トシテ鳴リ其識見ト博
學ト以テ史學ノ英斗トシテ仰カル
實ニ先生ニ我々郷党唯一ノ誇リニシテ
亦々欣慕ノ標的ナリ
何ノ幸ゾヤ今日親シク先生ノ風貌
ニ接ス此地ノ虎尾大日本衆糖株式會

社黨濟支社ニ從事スル縣人六拾餘名
舉ツテ父トモ兄トモ渴仰止マザル東
心ニ至情ヲ以テ歡迎ノ意ヲ表ス

昭和四年二月十七日

肥後會々長

林

亥熊



蕪峯徳富猪一郎先生

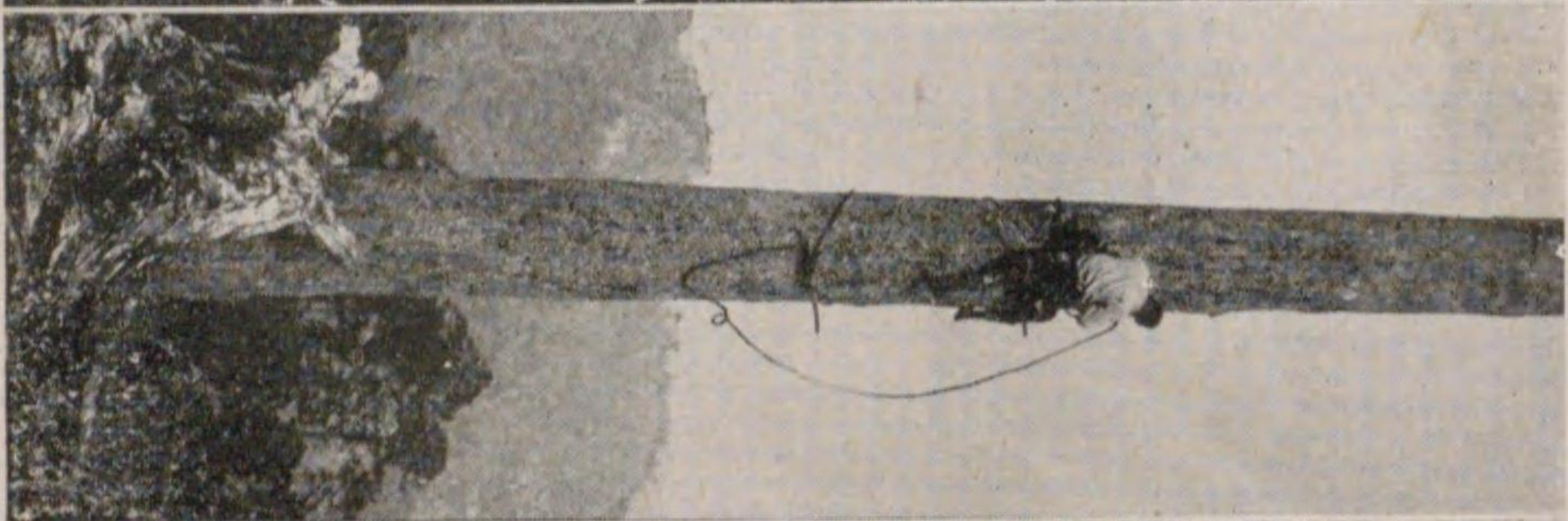
侍曹

阿里山塔山之巖

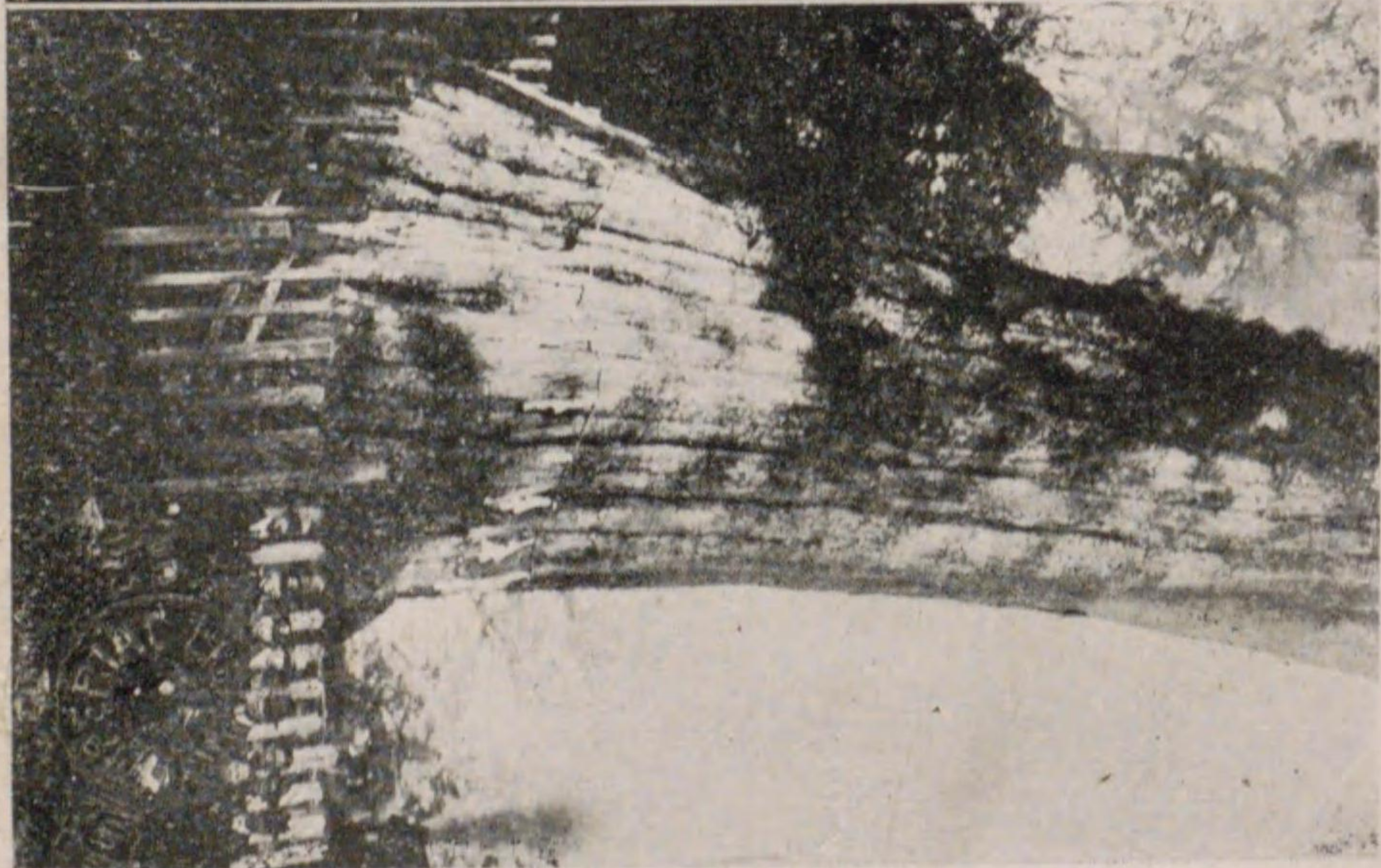




木伐同



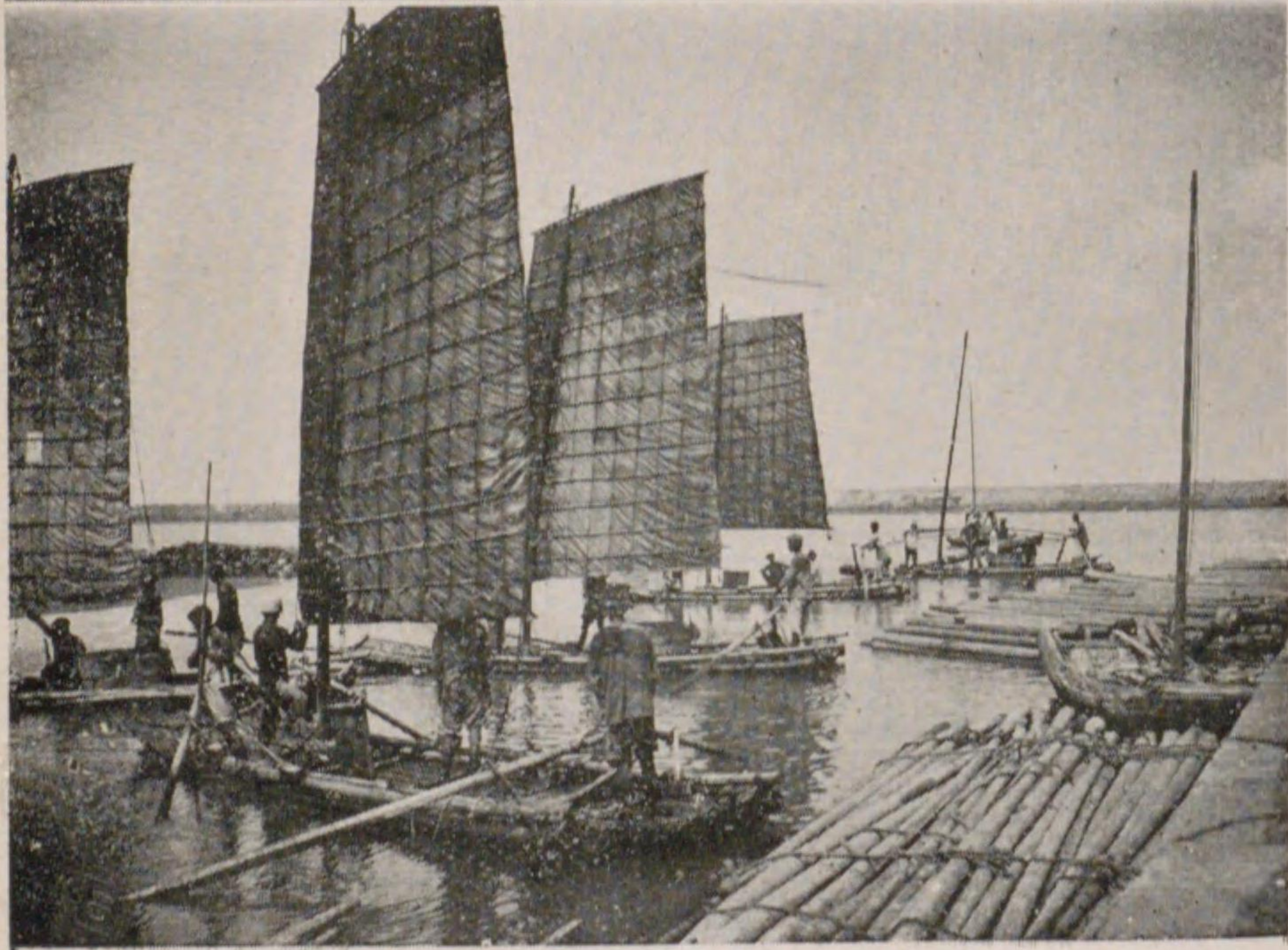
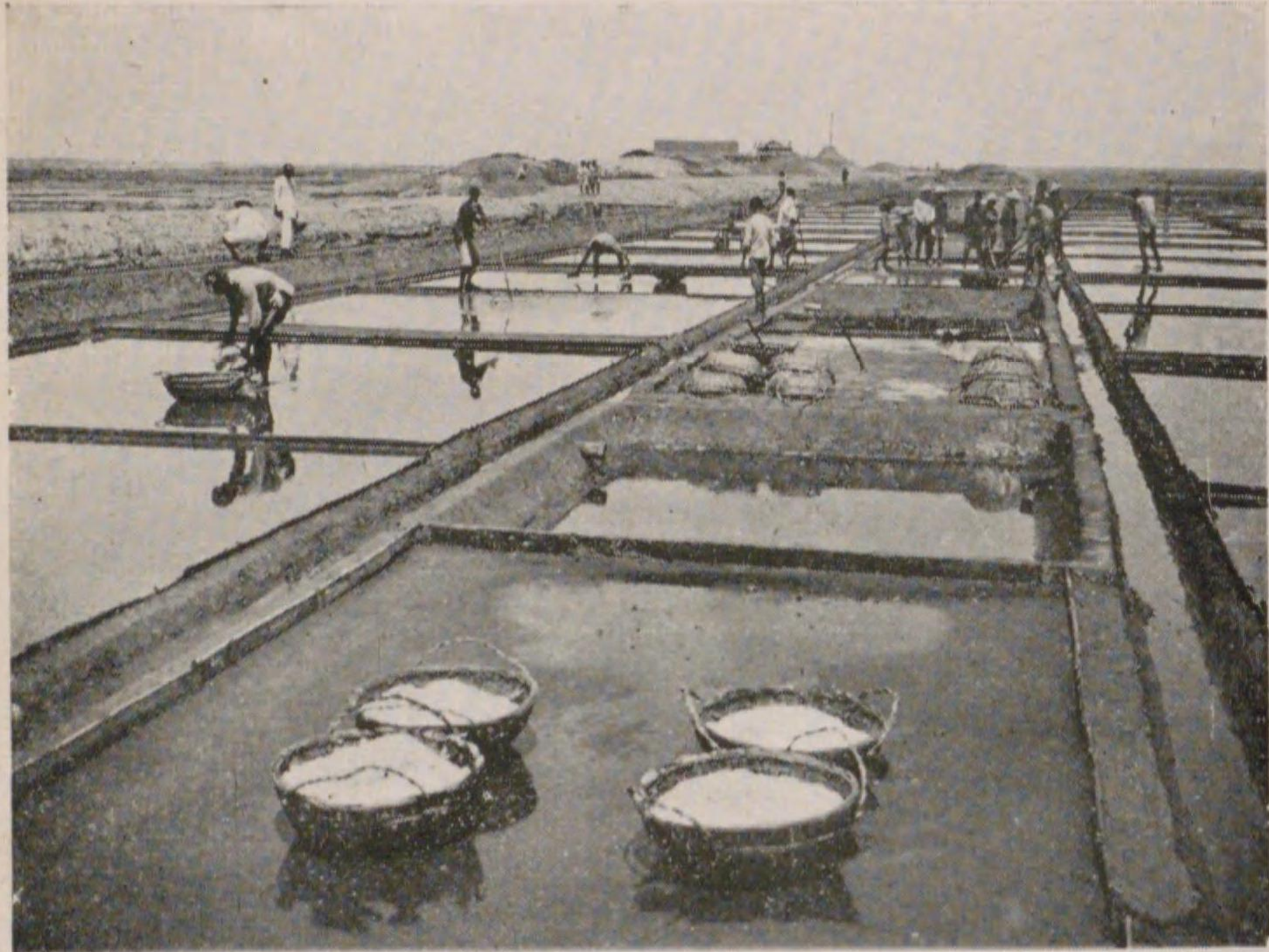
リ登木同



木神の山里阿



田 鹽 の 南 臺



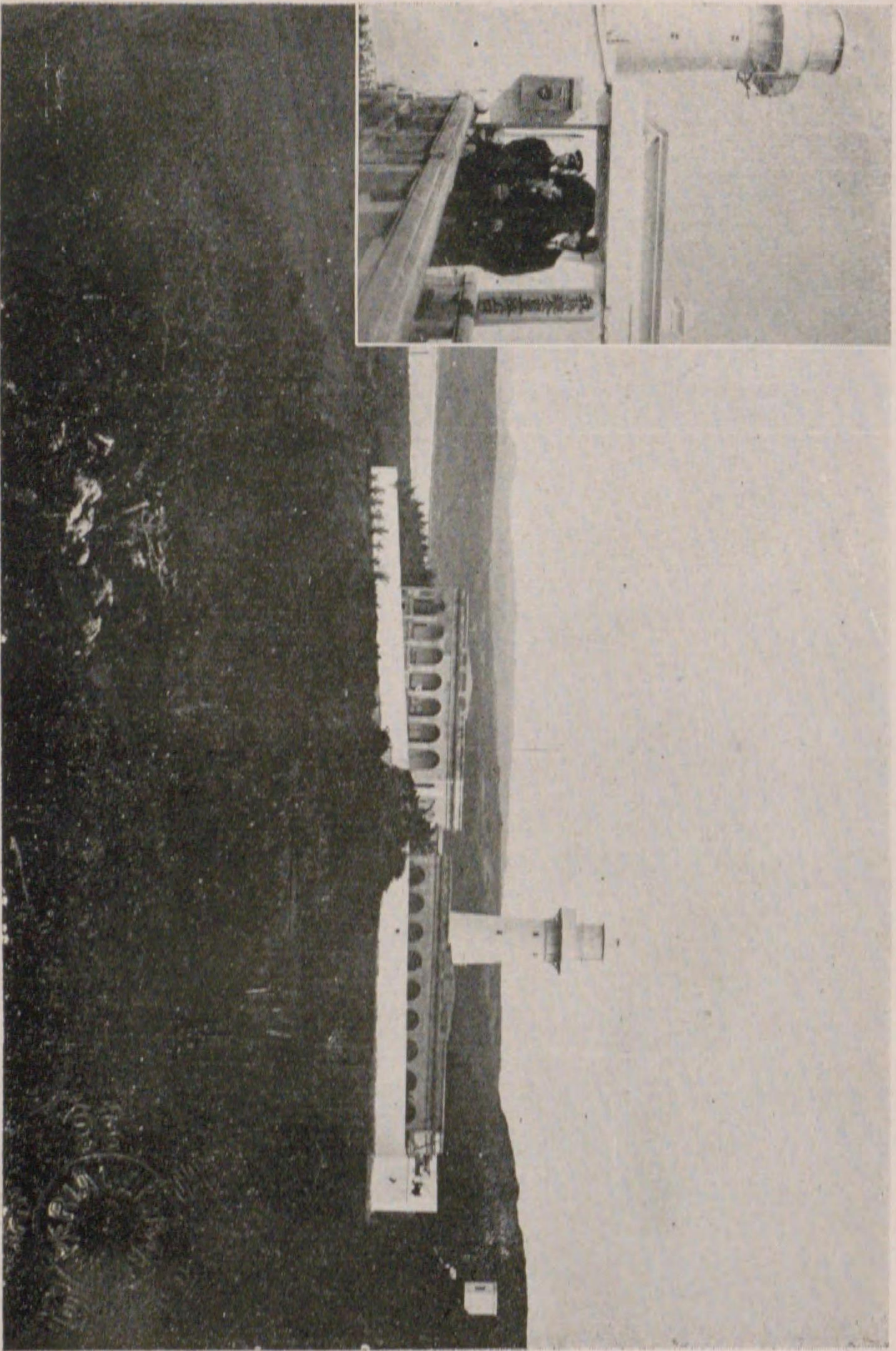
筏 竹 の 内 港 雄 高



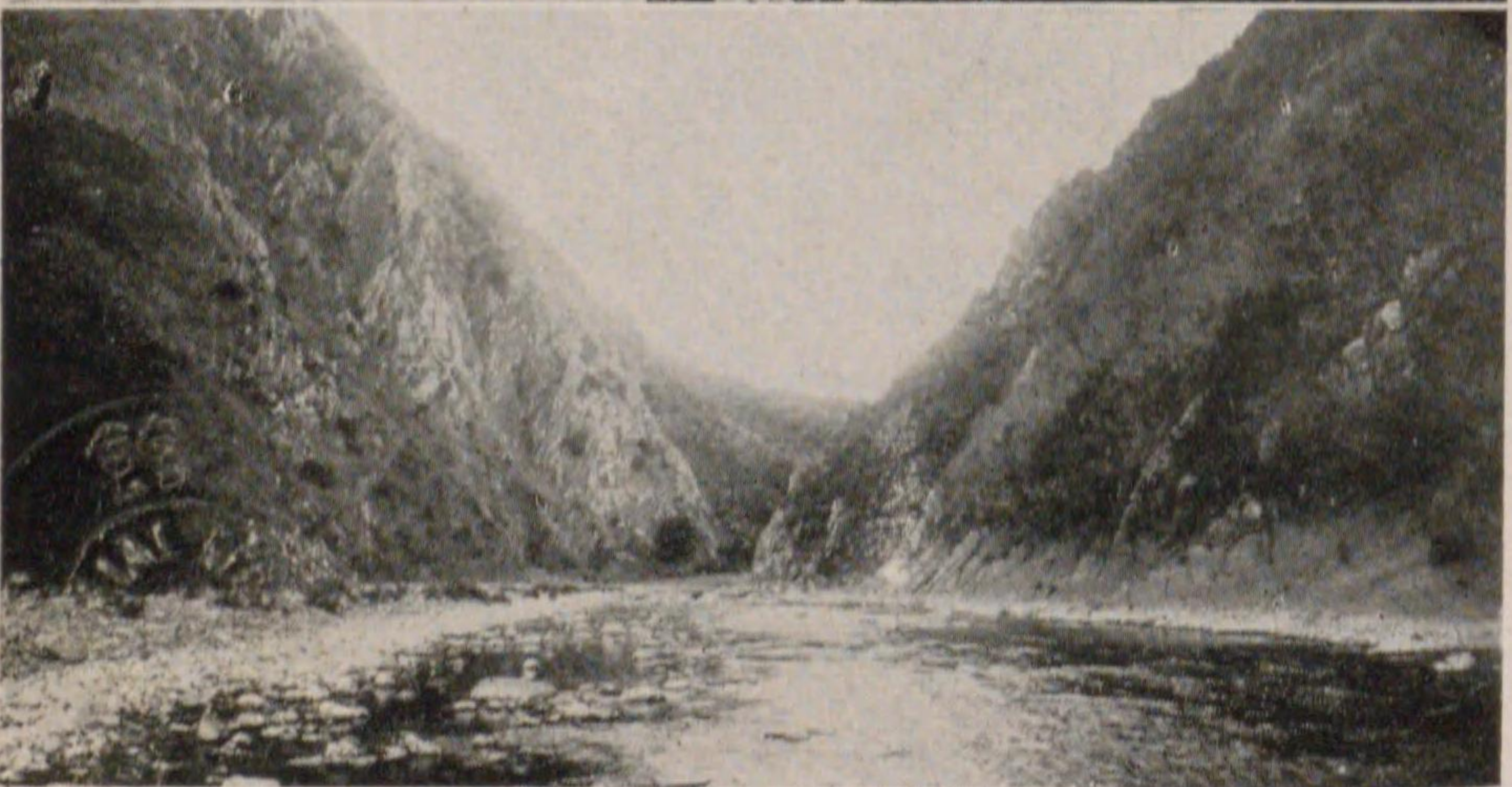
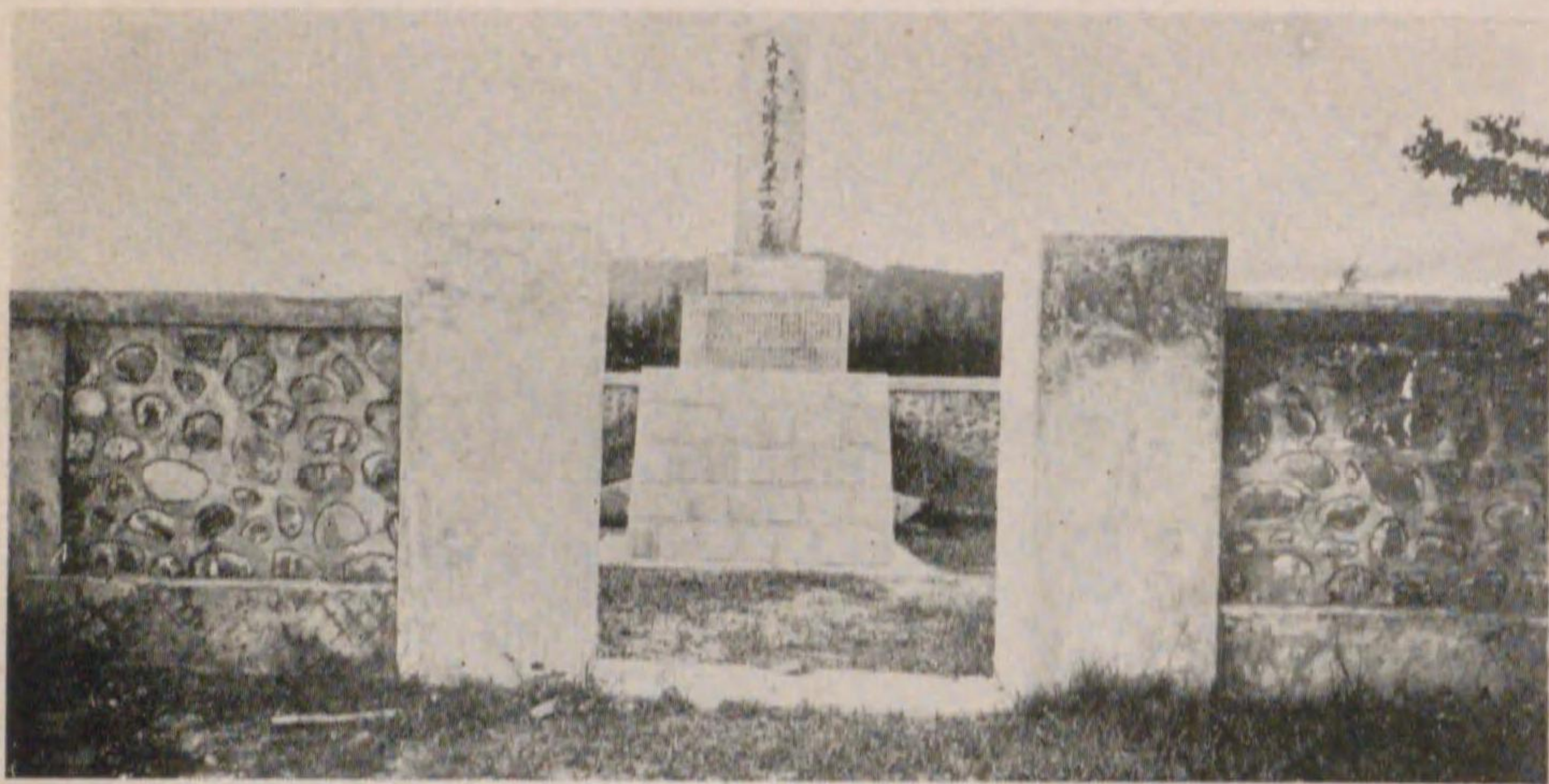
嘉南大圳にて



臺燈鼻鑿寫

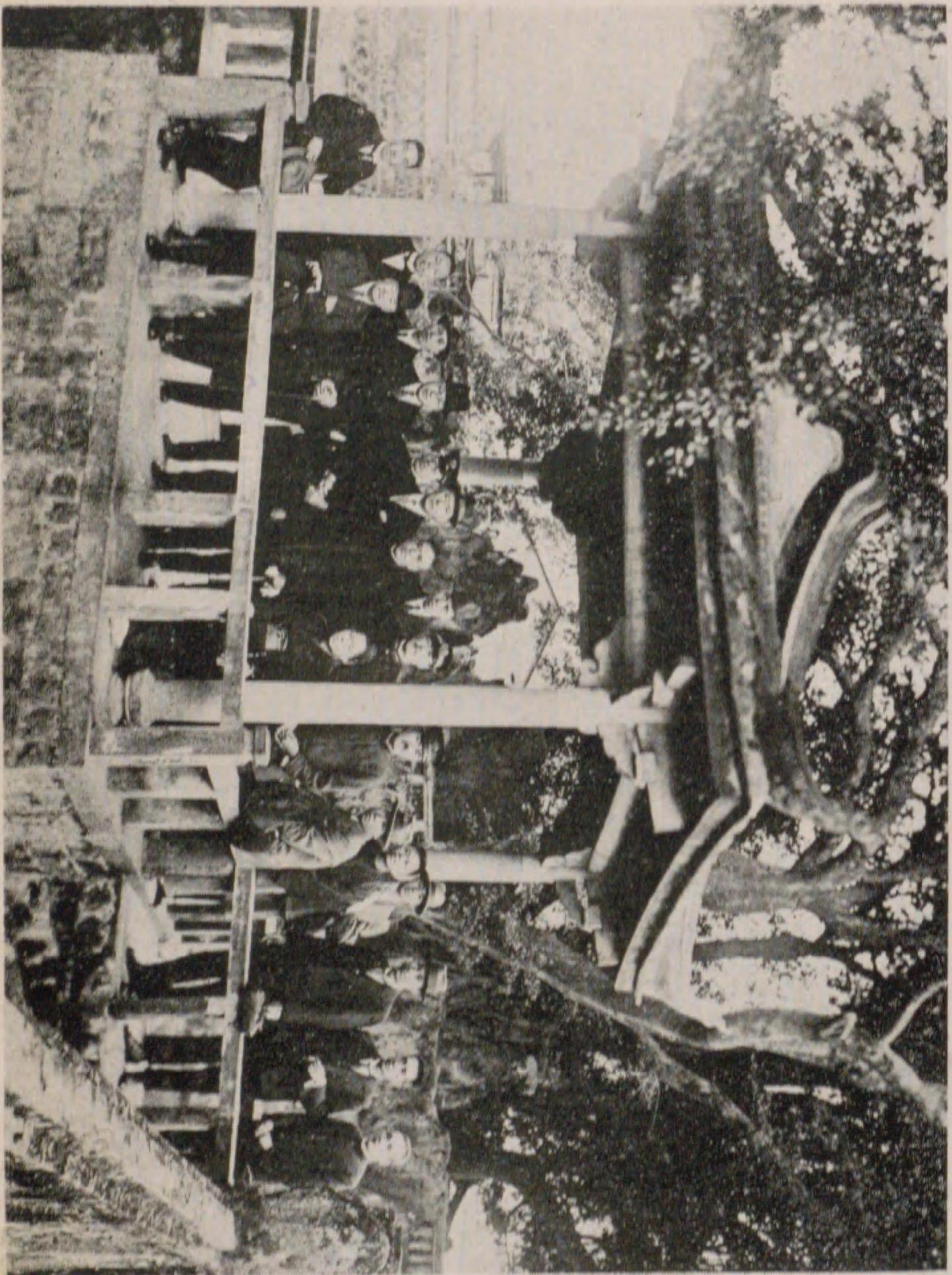


恒春車城庄埔琉球藩民の墓

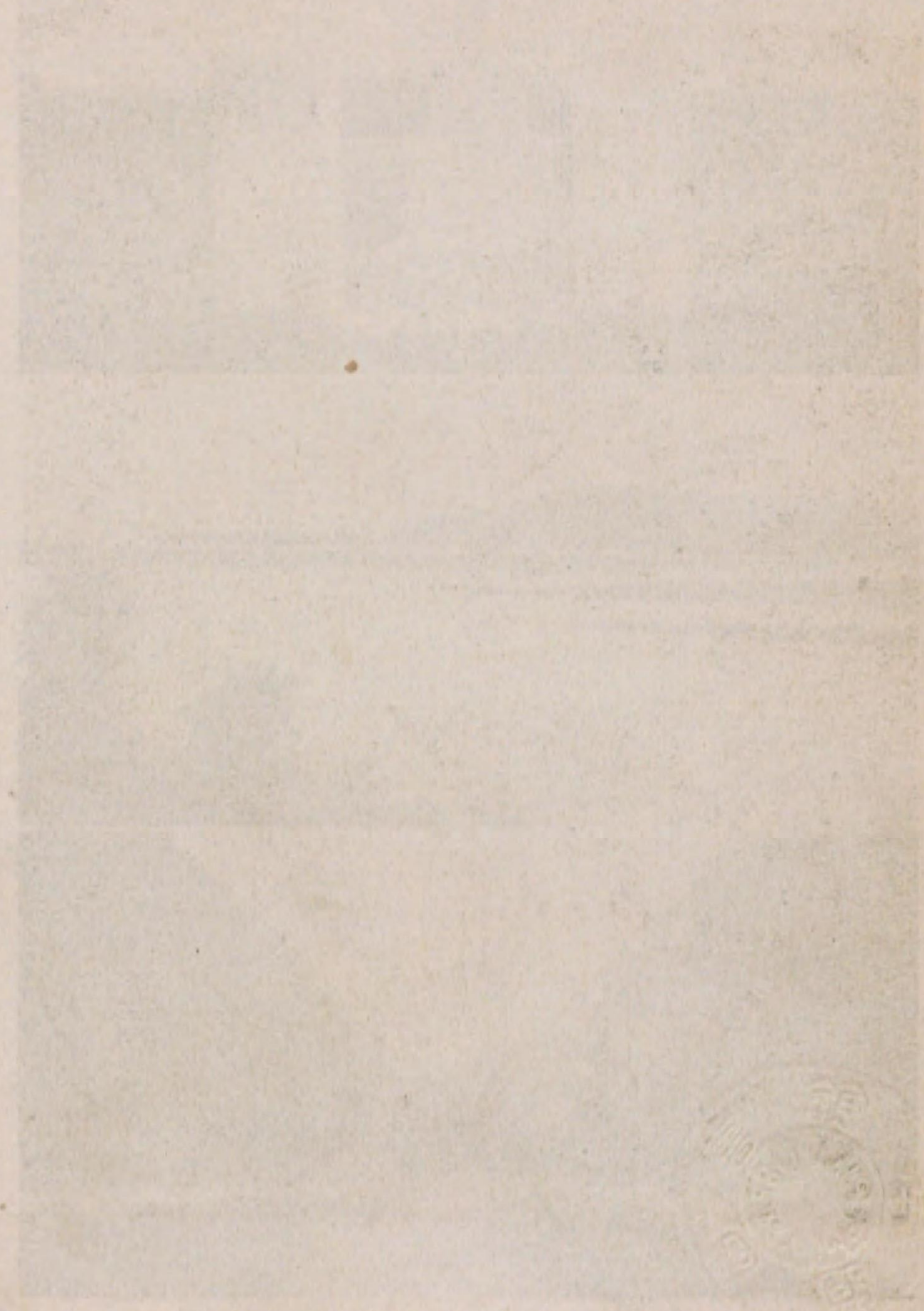


同 龜山西郷都督の陸上地(中)と苦戰地跡(下)





板橋本源氏邸にて

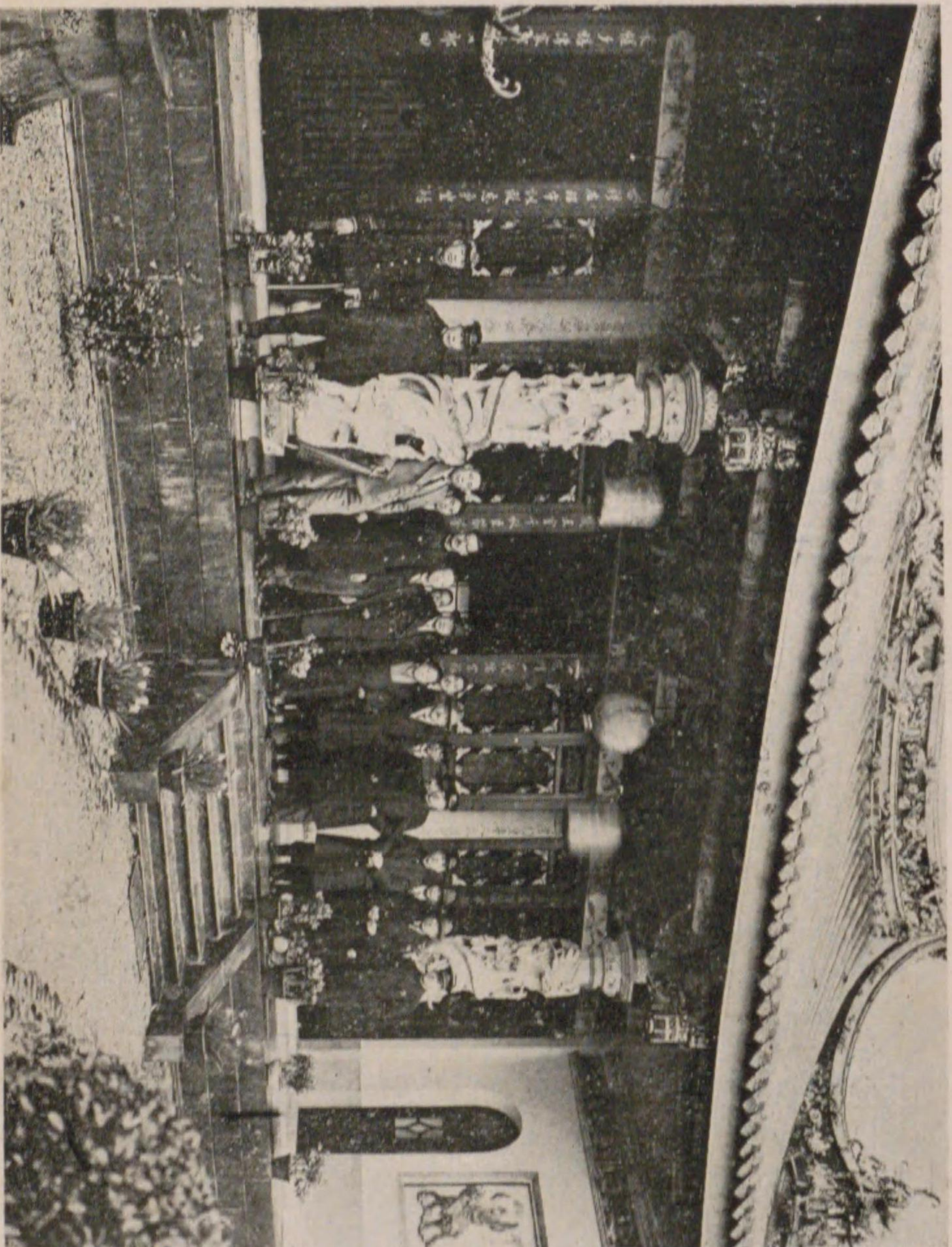


草山温泉に



草山雅集





基 隆 國 氏 年 氏 耶 基 隆



臺灣遊記

一 臺灣と予

蘇峰學人

明治二十七年（ねん）の下半期頃（ころ）かと覺ゆ。故松方海東公（おほまつかたかいとうこう）の名によりて、臺灣占領の意見書（いけんしょ）を、廣島大本營地（ひろしまたいほんえいち）に於て認めたるを記憶す。明治二十八年（ねん）の始（はじめ）には、民友社（みんゆうしゃ）から「臺灣」なる小冊子（せうさつし）を刊行した。此の編纂（へんさん）には、塚越芳太郎君（つかごしよしたちうくん）を煩（わづら）はしたるかと思ふ。予と臺灣とは、決して没交渉（ぼつかうせう）ではなかつた。然も今日（こんにち）まで親しく臺灣を見なかつたことは、何故乎（なにゆゑか）。別に理由（りゆう）はない、唯だ其の機縁（きえん）なかりし爲めのみ。



臺灣には予の友もあれば、門人もある。特に予の知己であつた樺山伯に創り、兒玉、後藤兩伯に大成したる治績をも尋訪したい。而して南荒の山水、風土、人情、風俗、亦た我が遊心を唆るもの少くない。偶々昭和四年一月、故ありて國民新聞社を去る。此に於て急に老妻と相携へて、臺灣行を企つ。是れ天賜の清閑を、最も有効に善用せんが爲めのみ。

二月五日、特急にて東京驛を發す。好天氣。横濱、沼津、静岡、隨處友人の歩廊に我等を待つあり。静岡からは「静岡民友」の大石君同乗、名古屋にては橋瑞超君送りて岐阜に至りて相別る。京都、大阪にても期したる友人、期せざる友人と相見る。神戸三宮に下車すれば、乍ち進藤神戸新聞社長に拉せられて、常盤花壇に至る。濱田君及び夫人、國木田君、岡本君、何れも舊國民新聞社員也。特に濱田、國木田二君は、單に社友と云ふばかりではない。

予等は橋君の携へ贈りたる鮎を喫し、更に汽車食堂の晚餐を喫し、今亦た常盤花壇にて御馳走を享く。算し來れば晚餐三回。されど驚く勿れ、三回食し來るも、壯時の一回にも値らざるを。花壇では「オコゼ」のチリ、甚だ妙。「オコゼ」は魚類中、頗る醜容にして、最も美味、別けて當夕のは新鮮にて、覺えず幾皿を快喫した。

海濱通りの西村に投宿した。入口には長谷場致堂の額がある。此處は昔ながらの汽船宿屋だ。此處には三四十年前の神戸がある。三宅驪七君夫婦、外孫女等、我等を待つ久し。乃ち包を祛らさ、土産物等を取り出した。

此の如くして第一日を、極めて愉快に且つ幸福に送つた。

昭和四年二月六日午前七時 神戸海岸通り西村旅館に於て。

二 神戸から馬關

二月六日、發船までは四時間ばかりある、舞子邊まで快駛せんかと思つたが、間もなく來客にて思ひ止つた。其中にも播州の堀覺治君の如きは、遠方から故らに尋ね來り、予の顔を見るや、流涕殆んど言ふ能はず。予が現狀——國民新聞退去の件——に深く同情してのこと、予亦た黯然。

西村旅館は、明治十九年の暮、父母を首として一家を擧げ、熊本から東上の際、立ち寄りたるところ。主人は六甲山下にありて、予に面會したしとのことにて、予は定めて前垂掛の老實の商人ならんと思ひさや、夫婦何れも新式と云はんより、最新式の文士ならんとは。

其の趣味は陶器、古書、ゴルフ。ゴルフは閉口だが、古書は予も聊か素好あり。予は御身は先人の稼ぎ溜めたる財産を、坐から譲り受けて、それを享樂する身分であらうと星をさせば、全く其通り、そこで社會奉仕の爲め、シンボジウムの會を、大正十四年以來開催しつゝあり。歸途には先生にも、御臨席を希ふとのことにて、予は會合は兎も角、書物だけは是非拜見願ひたしと約束した。主人は西村貫一、藏書標などに就ては、頗る研究してゐると承る。

十一時瑞穂丸に乗る。八千五百噸の新式船にて、氣持尤も佳し。一行は我等夫婦、仁藤生、臺灣新聞取締役東京支局長 徳富迪君、及び予を送りて臺北に至る鹿子木彦三郎君。

送行には、阪神の同業者（予は失業者なれども）親戚、其他予の愛讀者の方々にて、サロンは可なり賑ぎ合つた。而して船中にて意外にも神田の書肆一誠堂主人

を見出した。彼も臺北に赴くと云ふ。

午餐から晚餐の間は、連日の疲勞にて、殆んど一睡過した。但だ岩屋の瀬戸と、小豆島、五劍山邊の風光を、一寸賞した。然も甲板の上、風寒くして久しく立つ可らず。風流とは寒きものとは、今更ながら首肯せられぬ。

布衣宰相卅餘春。

休謂千言筆有神。

今日始知無職業。

乾坤落落一閑人。

此れは國民新聞引退聲明書發表の口占したるもの。船窓偶々東坡詩集を讀み、更に左の一首を得た。

文章豈敢擬三蘇。

自笑平生心計粗。

一事較優前輩跡。

雲飛水宿老江湖。

心計粗の三字は、正しく予の病處。されど東坡先生は、一生官職に繋かれたれ

ども、予は一生野人として、大自由境に在り。憾む所は、大自在力——阿堵物——を少くののみ。

昭和四年二月七日午前六時 船漸く馬關海峡に入らんとす。

三 長府及び乃木神社

二月七日、曉起、船は既に馬關海峡に入る、海風面を吹いて寒し。門司に著港間もなく、人吉方面から井福君、別府から日名子君、やがて八十歳に垂んとする予の長姉山川老夫人は、熊本から近澤、大橋二君を伴ひ來る。九州日々の後藤是山君亦た來る。關門の新聞記者諸君は先づ在り焉。吾母の没後長姉を見る猶ほ母のごとし。極めて簡単に、國民新聞引退の事情を語る。要は郷里の親族達を安心せしめんが爲め也。

門司税關長泉至剛君は、予の故人也。小蒸汽艇を舩して、來り迎ふ。乃ち我等及び來訪者諸君一同、之に乗じて馬關に抵り、自動車にて長府に赴く。馬關の街を出づるや、道は海峽に添ひ、對岸の豊山手に抱る可し。一路坦々、自動車快駛路として、寔に眺へ向さである。

泉君の語る所によれば、前日までは風勁く、雪さへ加はり、殊に寒かつたが、今日はまた打て變りたる好天氣だ。長府は前に灣を控へ、後に山を負ふ。干珠、滿珠の二小嶼は、指顧の間にあり。英雄生處山河好、此處が乃木將軍の故郷であると思へば、我をして更らに風光に流連せしむるを覺えしむ。

乃ち乃木神社に詣し、寶物庫を觀る、其の舊邸址を訪ふ。豫言者故郷に尊まれずと云ふが、其の故郷に神社として祭られたる將軍は、何たる幸運兒であらう。而して將軍を此の如く祭る郷人も、亦た何たる仕合者であらう。

地は二百二十三坪。柿や、梅や、亦た防風の爲め乃木十郎翁が、將軍の幼時に將軍をして、手栽せしめたる杉などあり。特に將軍が愛賞したる井戸端の老梅は、龍の如く蟠曲し、樹下の水仙は半ば奇葩を吐いてゐる。正に是れ宛然一幅の南畫。

記念館は、舊邸其儘のものを模造し、唯だ少しく前に推し出したばかりだ。建坪は八坪二合五勺、六疊、三疊、及び土間二坪に過ぎず。廂の下に踏み白あり、其上に見臺あるは、米を搗きつゝ、書見したるものと思はる。

萩に松陰神社あり、長府に乃木神社あり。何れも長へに長防二州の鎮たり。我等の注文は、此れより以上、餘りに人工を加へないことだ。莊嚴の美は、決して古人を偲ぶ所以ではあるまい。

我等は神功皇后に由緒ありと稱せられたる忌神社に詣し、社域より渺々たる滄波を眺めて、當年の遠征を憶ひ、船に還れば福日の池田君、泉税關長夫人、人見君未亡人、及び其の令嬢など、何れも船に待ち受けつゝあり。最早發船の期に迫りたれば、我等は唯だ目と心とを以て、相ひ語るに過ぎなかつた。此の如くして我等は半日を最も愉快に過し、船はやがて海峡を過ぎて、六連島の外に出でた。

昭和四年二月八日午前五時半 瑞穂丸客室に於て。

四 瑞穂丸船中

二月八日、今日は全く安樂日也。但だ無線電信の爲めに、外界と交通斷絶の出来ぬが、是非もなき。

早起船窓より、紅暎の海中から跳り上るを見る。亦た一奇。洋上點々、トロール

船を見る、日本漁業者の勇敢と、銳進とは、隨處に立證せらる。世界中の魚介は、日本漁業者の取るに任す。予は船影を見送りて、遙かに漁運の萬歳を祝せざるを得ない。

昨日來屢は臺北から講演と、宴會の申込がある。講演と、宴會と、揮毫とは、予の旅行の三禁物である。臺灣行に就ても、特に此事を理り置いた。然るに講演に就ては、一再ならず長文の電信が到來し、當惑の至りだ。

予は凡夫である。四十年來の國民新聞を離れたる予の心中は、甚だ落寞である。到底此際講演などの気分にはなれない。予が臺灣に遊ぶは、單に臺灣見學の爲めのみではない。寧ろ内地を離れ、徐ろに心中の傷を療せんが爲めだ。予は斯ることまで他人に語るを好まない。されど餘りに強請せられたから、已むを得ず、二回ほど其の理由を述べて、理つた。

序でながら一言する、予は臨時に講演するとを好まない。即座料理は、予の所好でない。少くとも數月前から準備して、予の最善を竭したいと思ふ。特に漫遊のついでに講演などは、最も禁物だ。講演のついでに漫遊は兎も角も。演者も精一杯に演じ、聴者も精一杯に聴く。此の如くして始めて講演の効能はある。

船中の和食、洋食共に試みた。洋食は先づ上位であらう。ローストビーフなどは、英國のそれを想起せしむる。近來食欲減退したが、船客となりて、聊か恢復したる心地がする。

夜は三等船客娛樂室にて、餘興の催あり。何れも船員諸氏の演藝にて、予等も打出しまで見物した。中には玄人に迫る藝人もあつた。

船中無事、予は既に携へ來れる、ベルロク著『ロベスピエール』を読み、最早半を盡した。讀畢るのが惜いから、更らに『臺灣史と樺山大將』を讀んだ。樺山伯は、予が壯時、知遇を忝くしたる先輩の一人だ。之を讀んで伯の臺灣に於ける功勞の、實に世人想像の外であることを知る。

昭和四年二月初九午前七時 瑞穂丸船室中にて。只今漸く船が横揺りに揺れて、船中らしき心地が生じた。

五 基隆より臺北

二月九日、昨日來船は聊か動揺する、横揺りだ。今朝は霧雨だ。船は四十度ばかりの傾斜をする。船中にては卓が倒れる、鞆が飛び出す、一寸船らしき光景。

層雲接レ水水連レ空。 萬斛樓船萬里風。
一片詩思無ニ著處。 漫漫蕩蕩水雲中。

同行の鹿子木君の爲めに、禁を破りて數紙を書す。動搖せる船中の揮毫は、汽車中でハガキを書くよりも、聊か厄介だ。

船は豫定よりも一時間早く、零時半、基隆に入港した。官民諸君、故らに臺北から出で迎られ、其の名刺は兩握に滿ちた。取り敢へず船のサルンにて挨拶する。亦た新聞通信記者諸君にも會見する。各位の名一々記せず、但だ松岡臺灣新聞社長、佐藤臺北支局長など舊友と、此の船中にて相見たるは、殊に嬉しかつた。

雨中の基隆、亦た風情あり。最近幾十日、東京に於て、殆んど雨に渴したる我等は、雨ほど有り難きものは無つた。

我等は瑞穂丸に別を告げた。少壯時代に荷物船にて歐洲に赴きたる吾、ボロ船にて太平洋を横斷したる吾は、一萬噸に垂んとする瑞穂丸、客室から、料理まで申

分なく、極めて居心地好き瑞穂丸に三宿したるを愉快とする。

大阪商船會社樓上にて、暫らく官民の諸君と談話し、二時發の臨時汽車にて臺北に向ふ。此行門司より生果會社々長村田俊彦君と同船した。君は曾て東拓理事として、朝鮮以來の舊知である。基隆にて木瓜一籠を惠まれた。此れは船中から電報もて、産地から取り寄せられたるものと云ふ。

沿道は宛も苗代時だ。氣候は内地の四月頃であらう。山も野も青々、蒼々である。水牛が田を耕してゐる。芭蕉が野に茂りてゐる。本島人の家屋が内地人の家屋と連りてゐる。斯くて臺北停車場にて、官民諸君の出迎を受け、臺北ホテルに落ち著いた。未見の地を踏むは、未見の書を讀むが如く、未見の人に接するが如く、格段の興味がある。

午後六時から總督官邸にて、我等夫妻の爲めに、川村總督の名によりて、豊田長官代理より晚餐會が催された。豊田君及び夫人、丸茂交通總長、後藤高等法院長、幣原大學總長、石黒文教局長、常吉專賣局長、平島秘書官及び夫人、高木電力社長、三好徳三郎君、川村臺日、松岡臺灣社長、及び臺灣新聞取締役東京支局長徳富迪氏等にて、御馳走と共に、愉快なる談話に打ち興じ、更らに臺灣東海岸の活動寫眞を、石黒文教局長の説明にて、觀覽した。此の方面は、時間なき爲め踏査を見合せたる地方にして、それを一夕にて見盡したるは、古人の臥遊にあらずして、眼遊とでも云ふ可き歟。

昭和四年二月十日午前五時十五分 臺北鐵道ホテルに於て。

六 臺灣神社

二月十日、今日は思ひ掛なき舊曆の正月元日、即ち本島人の新正である。天氣

は陰鬱だが、頼ひに降雨はない。先づ臺北市の見物と出掛けた。最初には申す迄もなく、臺灣神社に參詣した。

我が大和民族の特徴の一は、隨處に神社を建立することだ。而してこれは最も感服す可き特徴だ。臺灣神社は、實に上古國土經營に大功勳ある大國魂命、大己貴命、少彥名命、及び北白川宮能久親王の四神を奉祀する神社だ。

能久親王が、近衛師團長として、領臺の當初、身を以て軍務に殉じ給ひし一事は、金枝玉葉の御自身に取りては、痛ましき極みであるが、我が皇族の爲め、我が國家の爲めには、千古不磨の好模範を垂れ給ひたる盛事である。

我等は坦々たる參社道路を駛り、基隆川に架したる明治橋を過ぐ。鐵橋三百呎、幅三十九呎、斯くて石礎を攀ちて社務所に至り、山口宮司と相見る。宮司は親王

御入臺の際より隨從して、今や神社に奉仕しつゝあり。宮司は意外にも、横井小楠先生より越前の吉田東篁翁に寄せられたる、書翰數通を示さる。而して其書は嘉永四年、先生が上國漫遊後のものにして、漫遊中面會したる知名の士に關する評論などもあり、一讀發明する所少からず。別に又た新島襄先生の書翰二通を見る。尙ほ宮司は、予が父洪水、予が叔父徳富一義に關する、横井、吉田兩先輩の書翰を藏すれば、取調べの上示す可しとのとであつた。途中にて停頓の虞ありたれば、此より清祓を受け、階を上りて、玉串を捧げた。而して宮司の案内にて、城内の各宮殿下の御獻木を觀た。就中大正六年十月、久邇宮殿下が、御手植あらせられたる稚松が、今や亭々として天を拂はんとする氣勢を現しつゝあるを。昭和三年の夏、殿下重ねて臨ませられて、御満足にあらせられた杯、宮司の打ち語りたるを聞き。今更ら殿下の猝かなる薨去を悼み、坐ろに涙を催した。

神社は臺北市の北、劍潭山の中腹に位し、東は基隆に連り、西北は觀音諸峰を望

み、南は蕃山疊沓、俯して臺北の平野を瞰る、而して基隆川は帶の如く、其下を環る。眞に神々しき形勝の地である。

予は成篋堂藏儲、勅版日本書紀の、特別複製一部を、刊行者一誠堂主人酒井宇吉の名を以て、神庫に納めた。希くは此書長へに社寶の一として存せよ。

七臺北見物

神社を下り、社域を横ざりて、劍潭寺を訪うた。此れは鄭氏時代の開基の由にて、觀世音菩薩の靈場だ。寺は劍潭山の南麓、基隆川の右岸にあり。當日は本島人の正月元旦なれば、何れも綺羅を飾り、滿艦飾の兒女雜沓し、香火の烟は喉を咽ばしめ、爆竹の音は、耳を聳せしむる。

此れから三橋町の墓地に赴き、明石總督墓前に、一瓣の香を献げた。總督は大正八年十月、郷里福岡に逝いた、而して遺言により、其の遺骸を此處に葬つた。栢蔭將軍は實に好男兒である。今日に於て斯人を懷ふの情、尤も深し。次には乃木大將母堂の墓、及び大將夫婦の遺髮碑を一拜した。

墓地には木犀の花が咲いてゐた、梔子花もあつた。又たけばくしき海老茶色の佛桑花も咲いてゐた。躑躅花も若干見かけた。

此れから建功神社に詣した。此れは臺灣に於ける靖國神社だ。其の建築は、和漢洋折衷とでも申す可きか、如何にも巍然だ。然も其の神殿の色硝子を箵めたるなど、何となく天主堂の氣味がある。白蟻豫防の爲め、故らに木材を避けて、コンクリートを用ひたと云ふ。されど神社の建物としては、如何にも不似合である。

予は植物の知識なし、されど植物園は、最も好む場所の一だ。亞熱帶、熱帶の諸植物に接し、如何にも愉快であつた。栢榔、各種の椰子、ごむ、想思樹、而して楊柳の花は、今や雪片の如く、『風起楊花愁殺人』の句の、如何にも眞境なるを想うた。我等は自動車の警笛に催促せられて、漸く植物園を出で、龍山寺に詣した。此處は艦舸方面にて、先づ淺草觀世音と同様、參詣の子女群集す。特に正月元旦のこととて、中々の混雜だ。とても劍潭寺の及ぶ所ではない。本尊は觀世音であるが、臺灣第一、若しくは唯一の彫刻家黃士水氏が、丹誠を抽んで彫刻したと云ふ釋迦御座す。開基は乾隆三年であるが、昭和三年十二月改築竣工したと云ふ。石柱から家根まで、彫刻盡した。

此處では香の外に、紙錢を焼き、其烟は濛々として、息もつまるばかりであつた。我等は鼓樓に上りて、周邊の光景を眺め、此處から臺北に於ける新聞通信者諸君の招宴の席なる、蓬萊閣に赴いた。

八 老新聞人の氣焰

蓬萊閣は臺北に於ける支那料理の魁である。比較的清潔である。予には同業者と相會するほど、愉快なることはない。我等新聞人は、互ひに一點の靈犀相通ず。本日は休日にて、故らに席を設けたる由にて、支度も十分でないとい主人の申譯があつたが、中々の御馳走であつた。

予も諸君の活氣に釣り込まれて、谷河臺日主筆の挨拶に、答辭として、大いに氣焰を吐いた。如何に吐いても老人の氣焰なれば、諸君も當てられる心配はあるまい。予は不老不死の靈藥は、唯だ新聞人たるにありと云うた。七度人間に生れても、新聞記者は止められないと云うた。惟ふに諸君も諒としたであらう。座間には臺北の本島美人も周旋した、老妻も彼女等と頻りに談話を交換した。其中には

曾て青山南町に寓したと云ふ者もあつた。

此れから大橋町に赴き、淡水河に架したる臺北橋を過ぎた。延長二百三十九間の鐵橋にして、工費百四十四萬圓、工程三年を経て、大正十四年六月開通式を擧げたと云ふ。同行の自由通信支局の安藤君は、山河を指點して、領臺當時土匪横行の事を説明した。

斯くて博物館に至れば、予等を待ち設けたる尾崎秀真君は、逐一案内し、逐一説明し、先づ石器、土器の類より、歴史的參考品、諸蕃族の土俗に關する資料等に就て、其の詳細なる意見を垂示した。

有體に云へば、當日は早朝よりの見學にて、暮氣憊るゝの際にて、十分に質問も出來なかつたが、然も尾崎君の所説には、予の蒙を啓く所決して少くなかつた。

更らに意外なるは、尾崎君が其の自室に導いて、壁間に予の父洪水翁手書の詩を掲げ示されたとであつた。此れは吾父が七十七歳の時、高崎正風大人に贈りたるものにて、如何にもなつかしかつた。予が父母は、高崎大人の彰善會の發起に、第一番に賛成し、其の會員となり、而して此詩は正に彰善會のことに關するものであつた。尾崎君は、高崎大人の依頼にて、當時彰善會雜誌の編輯者として、此詩を大人より轉贈せられたるものと云ふ。

此の如くして臺北の第一日は了つた。而してホテルに於て、晚餐の後、東京に於ける不信任案否決の報に接した。東京は定めて騒がしきことであらう。

昭和四年二月十一日午前六時半 臺北鐵道ホテルの一室に於て。

九 病友訪問、新店遊賞

二月十一日、臺北の此頃には、珍らしき好天氣。著臺以來、始めて日光を見て、此の紀元節を祝す。我等は起き出るや否や、先づ散歩に出掛けた。昨日は本島人の正月元旦、今日は帝國の建國祭日、市中の光景、何れも活々としてゐる。

我等は舊友梶原保人君を、病床に見舞うた。君は大江義塾生の一人にて、實に『國民之友』の社中である。相見ざる二十餘年。舊を談せんとするも、君は久病沈衰。唯だ互ひに手を執りて、兩顔の涙珠相滴るを見るのみ。

室内には新島先生の書、洪水翁の詩、及び予が新島先生の墓に謁したる詩を、明治三十二年頃書したるもの、及び健次郎弟の書牘を掲げてある。一として我が思出の種子たらざるものはない。

それから西門市場を觀た。吾妻は野菜類の珍らしく、且つ廉價なるに驚いてゐた。

予は拳より大なる老鰻が、活洲に泳いでゐるを見、且つ菓物の美なるを賞した。

此れから南門を出で、一路新店に向うた。行程三里、センダン樹の並木を貫いて駛る。満目の青山、田には苗代、畑には豆花や、菜花が満開だ。溝渠の水は、溶溶として流れ、輕風習々面を吹いて寒からず。紀元節のドライブとしては、最高の天氣であり、最高の場所である。

新店は、文山郡新店庄にあり。溪水は源を蕃地に發し、此處に至りて斷崖絶壁を縈廻して、碧潭をなす。先づ滯八町の規模を小にしたるもの。我等は堤防の上を歩して、向岸の風色を幽賞し、其の沙洲に繋げる漁舟や、其の潭上に欲つた危崑や、其の崑上を掩ふ綠樹や、更らに其上に連る青山や、而して其の沙洲の邊にある楊柳やを眺め、此身亦た宛も南畫景中に在る心地した。

但だ正午には、我等の爲めに官民の驩迎會が催されたれば、愛を割いて歸途に就いた。

一〇 臺北圖書館

紀元節正午、鐵道ホテルに於て、臺北官民の驩迎會は、催された。頗る盛會であつた。當地の重なる方々は、何れも出席せられた。發起者の一人、田端臺北市尹は、會主側を代表して、歡迎の辭を陳られた。

予は何ぞ此際予の意見を聞ききたしとの言に對し、答辭として、日本國民史の研究を必須とする所以、及び日本國史の特色一二に就て、聊か語る所があつた。今更配達し來れる『臺灣日々新報』を見れば、『臺北官民有志主催の歡迎會席上、徳富蘇峰氏の獅子吼』と題し、其の筆記が掲げてある。

とても獅子吼と申す程には參らなかつたが、諸君の芳情に酬いる一片の微意を看
取せられなば、此にて仕合である。

會散じて後、予等は圖書館に石黒文教局長、幣原大學總長、其他の諸君と、
山中館長の案内にて赴いた。館は元來彩票局の爲めに作りたる由にて、書籍館
としては、不便且つ不相應であるも、建物としては中々立派だ。然も富籤の本家
としてよりも、學問の府として使用せらるゝとは、館其物に取りては、昇格と云
はねばならぬ。

館長は豫じめ予の注文に應じて、和漢洋各種の珍籍を、一室に陳列して、閱覽
に供せられた。特に臺灣に關する地誌類の蒐集には、最も苦心せられたる由にて、
内閣文庫やら、圖書寮やら、帝大、上野邊にも、それぞれ手を廻はし、且つ對岸

の福建省からも收拾したらしく、假すに數年を以てせば、臺灣に對する文献は、
悉く此の館中に集むるを得るであらうと思はれた。

予自身に取りても、明治七年征臺に關する史料を、陳列せられたる書籍中に於て
見出し、其の嘉惠を荷ふと少くなかつた。

最も面白き一は、乾隆時代臺灣土匪討伐の銅版圖幅であつた。此れは畫毎に乾隆
御筆の題詩ありて、十二枚連續してゐる。此れは帝が佛國巴里に托して、銅版に
て彫刻せしめたるものにて、其類少からざるも、特に其の題目が、『臺灣土匪討
伐』にあるが爲めに、臺北圖書館の藏儲としては、最も其所を得たりと云はねば
ならぬ。

午後からは朝來の好天氣も、何となく曇り、雨もやがて降り出したれば、他日を

約して去つた。惟ふに臺灣總督府の富と、力とを以てすれば、今少しく書籍館を優遇しても、差支あるまいと思ふ。

昭和四年二月十二日午前七時半 臺北鐵道ホテルに於て。

一一 總督府及總督官邸

二月十二日、今日は先づ臺北見物デーとでも云ふ可き日だ。雨は止んだが、空は味噌汁の如く濁りてゐる。ジメジメした天氣だ、ベタベタした天氣だ。臺北の諸君は、寒くてたまらないと云ふが、東京からの客には、寒くないだけが取柄かと思はれた。

先づ中央研究所に至り、一通り見學す。素人には白蟻や、毒蛇の話が、尤も興に入つた。やがては青蛇とか、百步蛇とか、飯匙蛇とか、雨傘蛇とか、凡有る毒蛇

の飼養所までも見た。流石の毒蛇も、即今は冬眠中にて、元氣が少かつた。

酒類研究の標本として、龍眼酒、紅酒、糖蜜酒などを饗せられた。予は唯だ其香を嗅いだ、けであつたが、同行の諸子中には、きゝ酒にて、其顔を酩酊たらしめたる者もあつた。

此れから臺灣總督府を訪問した。此れは工費三百三十三萬餘圓、建坪二千七百七坪、各階延坪一萬〇二百六十八坪、ルネスサンス式の堂々たる大建築である。予等は

予等と前後して、生蕃の老若男女約二十名、警官に導かれて參觀に來た。此に於て東京からの熟蕃——申迄もなく蘇峰生一行——と臺灣の生蕃との會見が、總督府政廳の大廊下にて行はれた。男女何れも顔面に黥し、男子は額の中央に、錘

直に一線を下し。婦人は其の上唇から兩頬にかけて、髭の如く、濃厚に描いてゐる。彼等の年少者中には、邦語を解するものもあつた。

此れから總督官邸の庭にて、豊田長官代理、石黒文教局長、平島秘書官其他と撮影した。それから上山蔗庵翁が、釣糸をたれたと云ふ池を環りて、樹色禽聲の間を逍遙した。庭上躑躅満開、池水に映じて頗る趣があつた。

一一一 臺北醫院

臺北醫院は、實に臺灣の誇りである。而して其中にある仁濟團は、臺北醫院の誇りである。予は東京に於て、後藤伯爵から此事を聞き、今更實見して、其の寧ろ聽く所に勝るものあるを覺えた。

本院建築の價格、二百七十一萬餘圓、其の建坪五千五百三十三坪、延坪一萬二千三百九坪、其の敷地は實に二萬三千九百八坪を占む。少くとも外觀は壯大、内容は清潔、其の清潔は、東京の赤十字社に及ばざるも、やゝ雁行するに足る。

予等は倉岡院長、松田仁濟團主事等と、仁濟團の仕出しにかゝる午餐の馳走に預り、一通り巡覽した。仁濟團は、臺北醫院に於ける患者の救護を目的とし、食物其他必需品の供給をなす。而して其の役員は醫院長が仁濟團長として、自餘の醫院の當務者が、何れも献身的に其任に當つてゐる。

予等は料理所、洗濯所、看護婦室、書籍室、販賣店等を過ぎ、特に料理所の清潔なるに敬服した。由來病院の賄と云へば、不廉と不潔は、避く可らざる通患と見做されたるに、此の仁濟團は、全く之に反して、廉價と清潔との標本となつてゐる。但だ此れは法のみでなく、亦た其人によりて然るものがある。苟も其人

にして一點の私心あらば、仁濟園も、不仁濟園とならむ。

此れから臺北水道の水源地に赴く。此れは新店溪の右岸から取り入れてゐる。我等は董花咲ける小徑を上りて、四阿屋の邊に至る。四望開豁、下に新店溪の碧流あり。案内の長谷川市助役は、先年ゾルフ獨逸大使が、流汗淋漓として、此處に上りたるを語つた。我等は仕合せに氣候がよかつたから、汗をかくまでには至らなかつた。

此れは人口十五萬を限度としたもので、即今臺北人口二十餘萬に上りたれば、別に水道計企あり、此れと相待つて給水し、併せて其の電力を利用して、新たに計企せられたる、臺北市街電鐵の動力に供する由。

此れから臺灣總督府中央研究所農業部を訪うた。所長大島金太郎博士は、予を見



るや否や、自分は當初から國民新聞の愛讀者にして、隨處に國民新聞と相伴はざるはなかつた。先生一たび去りて、實に落寞の感に堪へずと申された。

乃ち其の標本室を一巡し、博士と相伴うて、臺北大學に赴いた。

一三 臺北大學

臺北帝國大學は、今や草創中にて、生氣溢れてゐる。總長幣原坦博士は、予の舊知だ。予は明治三十九年五月、京城に於て、始て君と相見、夜中當時の朝鮮町に、君の寓所を訪ひ、犬に吠えつかれたとを記憶してゐる。當時君より「大韓境域考」の一書を惠まれ、一通り朝鮮に關する地理的知識を得たるとを感謝してゐる。

座中には幣原總長、大島理農學部長（金太郎博士）藤田文教學部長（豊八博士）

三澤高等學校長、山中總督府圖書館長などあり。特に青木司書官の肝煎にて、諸珍籍を縦覽せしめられたるは、快心の事であつた。

固より今日のところにては、圖書も十分ではないが、臺灣研究の篤志者伊能嘉矩君の遺藏全部を、收容するを得たるは、大學に取りて、先づ何よりの社である。伊能君の遺藏中には、新聞の切抜帖も少くなかつた。而して其中には予の國民新聞に掲げたる『日曜講壇』東京たより』其他小品文の類、其の一半を占めてゐた。此れは臺灣には直接關係なきことながら、伊能君の目に、何か留つたものがあつた爲めであらう。予は此の篤學者と遂ひに相見るの機會を逸し、今更ら遺憾の情に勝へない。

愛を割いて大學を辭し、專賣所に至り樟腦精製の現狀を一覽し、歸宿間もなく高木友枝翁の邸に、晚餐の馳走に赴いた。

來賓十餘、何れも臺北に於ける官民の一粒撰りの方々であつた。主人翁は、予に向て、若し臺灣に關して、御研究もあれば、餘りに難題ならざる限りは、此の座中の面々にて御返答に差支へる心配はありませぬから、御遠慮なく質問あれとの言であつたが、予は諸先生のお顔を拜見しては、最早胸が一杯になりて、とても質問などいたす勇氣がないと挨拶した。

されど談笑の間に、臺灣の昔から今に至るまでの逸事珍話など、それとはなしに承り、腹にも頭にも十二分の御馳走であつた。特に高木令夫人が、吾妻の爲めに、最新式獨逸製の料理器具などを示し、實物教育を惠まれたるは、望外の仕合であつた。

昭和四年二月十三日午前六時半 臺北鐵道ホテルにて。

一四 桃園より大溪

二月十三日、午前八時ホテルに於て、熊本縣人の驪迎朝餐會がある。朝餐の驪迎會などは、頗る振つてゐる。然も時間無きために、強ひて繰り合せた結果此の如し。雨と云ひ、朝と云ひ、雨ながら人寄りには禁物だが、然も會者百餘名、鈴木君、江上君、値賀君、其他の舊知新知——實に盛會であつた。聞けば縣人の家族懇親會などには、千餘名も集ると云ふ。熊本縣人の臺灣に於ける、其數に於ては、第一位。予は戲に諸君に向て、若し臺灣に普通選舉制が布かる日には、當地を選舉區として、打て出んと云へば、諸君何れも其節は必らず御身を當選せしめんと相答へた。

予は同郷の諸君が、予の現狀に對し、多大の同情を垂れらるゝを見て、中心より

感謝し、尙ほ今後に於て、今更一番の奮闘を試みんとする決心を披瀝した。

午前九時二十二分臺北停車場より乗車、汽車窓から眺れば、雨中の光景亦た佳、一時八分桃園著、此より自動車にて大溪に至る。大溪は從來大嶺嶽と稱す。市街は大溪の流を帯び、斷崖削り成す高臺地の上に在り。此處は乾隆の初期に、福建人謝秀川なる者、開拓を始め、光緒十二年臺灣巡撫劉銘傳此地を卜して、北蕃統轄の策源地となしたる由にて、理蕃の上からは、要地の一であつた。爾來山地に製腦業開け、平地には米、茶等の製産増加し、今は大溪郡役所の所在地となりてゐる。

予等は此處にて自動車を下り、出迎の官民、及び學校生徒に挨拶し、小閑を偷んで、奈須未亡人に伴はれ、故奈須義質君の宅を見舞うた。奈須君は大江義塾社中の一人にて、『國民之友』創立の際、最初に民友社の庶務に従うたる者。志を立

て、此地に住し、専ら植林を事とし、前年逝いた。未亡人の筐底を探りて取り出されたる遺物中には、洪水翁及び予の書簡、我等同人少壯時の寫真などもあつた。其の書簡は明治三十七年四月附にて、『双鬢霜を帯ぶるも、尙ほ一點の雄心を存す』の句あり。回顧既に二十有六年、往時を憶うて悵然之を久らす。奈須君未亡人は、内田伯爵の令妹にして、若し奈須が居たならば、如何に喜ぶ可きにと、涙を揮うて語られた。

一五 大溪より角板山

大谿から臺車に乗り換へた。頼ひに雨は止んだ。臺車は二人相並んで乗り、後から二人の苦力が、レールの上を推して行く。巧みに其の勾配を利用し、傾斜線に至れば苦力も後に乗りて、自然の惰力に一任す。途中本島人及び生蕃に出會す。其の男女老若を問はず、何れも跣足である。

道は漸く萬山の中に向て入る。隨處に開墾が行き届いてゐる。宛も内地の中國路を過ぐるが如く、『墾破山上幾朶雲』の趣がある。平地には田や畑を作り、傾斜地には茶を栽ゑてゐる。殆んど寸分の餘地、隙地さへ無い様だ。

山中に入れば明治三十六年の造林にかゝる樟樹が、鬱蒼として天を掩うてゐる。更らに宮の臺に至れば、此處は秩父宮、久邇宮、朝香宮各殿下が、御休憩、御展望の跡として、四阿屋がある。海拔一千四百十尺と云へば、左程の高地ではないが、展望には最も妙だ。但だ當日は白雲繚繞、翠巒出沒、宛も米點山水を見る心地して、其の髣髴を得たる耳。

此れから八結に至れば、本島人の小部落あり、桃花、李花、歴亂として、紅白妍を争ひつゝあり。此の附近は悉く三井合名會社の所有地にして、萬目茶園なら

ざるなし。其他樟樹、想思樹、臺灣松、銀夜合花樹などを雜栽す。而して苟も水利の便ある所、掌大の地も、悉く墾して田を作つてゐる。

我等は流水東の三井舎宅にて、午餐の饗應に預つた。時間も二時を過ぎ、特に肥たる家鴨のスキ焼にて、覺えず満腹した。而して田中君の案内にて、烏龍茶及び紅茶の製造所を一覽し、三時出發、四時には角板山の教育所に至り、當地の官民及び生徒に出迎へられ、相ひ伴うて、教育所に至り、蕃人小學兒女の教習を一覽した。

彼等はいり代り立ち換り、談話をした。其中には金太郎の話もあれば、馬や、鼠の話もあつた。日本建國神武天皇の話もあれば、海軍記念日の話もあつた。特に驚きたるは、ナイチンゲル嬢の話であつた。如何に考へても、臺灣生蕃の子供から、クリミヤ戦争に於けるナイチンゲル嬢の話の聞かんとは、予自ら予の耳を疑

ふ程であつた。其他暗算、習字、圖畫など、何れも見事の出來榮であつた。而して生蕃人にして醫學校を卒業したる、公醫渡井三郎君にも面接した。

一六 角板山の一夕

我等は此から物品交換所に赴き、生蕃の製作品を一覽し、更らに蕃社を見舞うた。其の家屋は最も簡易にして、所謂簡易生活の標本に幾し。倉は竹柱茅簷であるが、其床甚だ高く、何となく正倉院の御庫を聯想せしむ。此れは南洋一帯、何れも此の式である。

斯くて貴賓館の庭上から、枕頭山、鳥嘴山、挿天山などを指點し、淡水河の水源たる碧流を俯瞰し、近く蕃界を眺め、更らに秩父宮殿下の大正十四年御渡歐の砌臺臨あらせられ、御手植遊ばされたる烏心石樹の成長しつゝあるを見、庭上に咲

ける緋櫻を賞し、我等一行も貴賓館の一隅に、倦脚を伸ばした。時に午後五時前、桃園より此處に至る、實に九里十七町。正直の所、此の山地に、悠然と他力を假りて、此身を運び來りしこと、倦脚などと申す柄ではない。冥加恐る可し。

同夜は結城警部から、明治四十年以來、生蕃討伐の物語を聞いた。此の一事は、故佐久間總督の功、最も大なるものにして、當時總督が五年計畫もて、臺灣に於ける尺地寸土も、我が皇化に洽ねからしめんとの苦心は、今や漸く其の効果を擧げつゝあり。然も世人動もすれば、之を亡却し、之を閑却す。而して總督を佐けて其事に従うたる諸氏の勞、亦た没す可らざるものがある。

貴賓館は、佐久間總督が、大正天皇の皇太子殿下にて在せし際、臺臨を仰ぐ爲めに建設したるもの。然も明治天皇の御登遐の爲め、其の事止んだが、爾來各宮殿下の臺臨を忝くし、總督の志は空しからず成りぬ。尙ほ角板山教育所に於

ては、當所駐在巡查本野演暢氏夫婦、最も献身的に努力し、その効果著明と云ふ。

予は生蕃人の男女生徒が、何れも元氣旺盛、態度活潑なるを見て、頗る快愉を覺えた。其の唱歌なども、實に勇ましきものであつた。而して其の面目、亦た秀發愛す可きものもあつた。夜來雨、今朝に至りて風さへ加はつた。歸途の困難想ふ可し。されど此位の困難は相當のことであらう。

昭和四年二月十四日午前六時十五分 角板山貴賓館の一隅に於て。此地は實に一千四百六十尺、甚だ高からざるも、奥地である。

一七 角板山より新竹

二月十四日、夜來の風雨、尙ほ餘勢を剩してゐる。角板山なる貴賓館の一隅に厄介となりたる我等は、起き出して、菴界を眺れば、四顧茫茫、只だ白雲のみ。庭前の緋櫻も、風に打たれ、雨に敲かれ、宛も是れ楊妃啼後の風情だ。

午前八時雨を衝て下山す。何れも臺車の中にうづくまり、外から荒布にて包まれ、唯だ前面に五寸四方のセルロイドの薄片を箆めて、明りをとるまでだ。されど概して下り坂なれば、苦力どもは其勞少かつた。斯くて大溪街に著し、公會堂にて小憩した。公會堂は大溪に臨み、川原一望、烟樹滄茫、頗る風光に饒む。奈須未亡人は、河原の漁梁を指點して、此れは其家に屬する鮎の梁であると語つた。憾らくは其期節に外れたことを。

大溪にて我等を角板山に案内したる山本大溪郡守、其他の諸有志に別れ、桃園驛に抵り、十一時五十分上車、新竹に向うた。

大溪街から桃園驛までの道は、桃園埤圳に沿うてゐる。此れは實に此の地方の高原約三萬二千甲の田畑灌溉用水を供給して、二期作田たらしめたる事業にて、大溪(舊名大崙坎溪)の水を、其の上流石門から取入れ、溪の右岸に沿うて、延長十二里に亘り、隧道、暗渠、開渠を穿つて、用水を桃園附近に導き、その幹支線の給水延長六十五里に達す。其の經費一千四百萬圓、大正五年に著手し、同十四年に完成したと云ふ。

途中から新竹州技師田島彌市君相迎へ、沿道の風光に就て説明した。君は熊本の産、柑橘の博士にて、新竹州の極柑が、今日の盛大を致したるは、専ら君の力によると聞く。予は君より極柑、桶柑、雪柑等の講義を聞き、聊か得る所あつた。現在極柑は、新竹州の新埔と、臺中州の員林とを、其の本場としてゐる。従來は自家用料として栽植したが、今や新竹州の如きも、重なる産物の一となつてゐる。

る。

午後一時十六分、新竹驛著、直ちに臺灣神社の分靈を奉祀する新竹神社に詣し、玉串を捧げた。神社は停車場の南三十町、松嶺山の頂にあり。折節雨は止んだが、風が強くして人を吹き倒さんとした。我等は北白川宮殿下の露營の遺跡や、新竹街にて御宿泊の家を此處に移建したる、爽吟閣に上り、當時御艱苦の模様を、詳かに神官の説明にて聞き、轉じて通草會社に赴き、其の製造の順序を一覽し、州廳を訪ひ、永山知事より新竹州の物産等に就て、説明を受け、新竹公園を廻り、永山知事其他官民の見送の諸君に別れ、二時四十八分臺中驛に向うた。

昭和四年二月十五日午前五時 臺中松岡邸に於て。

一八 新竹より臺中

新竹から臺中に向ふ海岸線は、一望沙地にて、遠く海に連り、何となく小沙漠の趣がある。聞けば沙丘が風に從うて移轉し、動もすれば家を埋め、田畑を没するの憂ありと云ふ。左もありなん。

見渡す限り遠沙にて、退潮の際には満目の干潟を現出す。予は海墾地の作業が、追ては行はる可きを豫想す。

沙原を變じて良地となすことは、和蘭人や、獨逸人には、決して珍らしからぬことだ。島田君の説明によれば、先づ沙地に茅を植ゑ、其間に木麻黄樹を植うれば、茅は沙を止め、木麻黄樹は、數年ならずして林を爲す可しと云ふ。木麻黄樹とは其膚は縦の如く、其葉は木賊に似てゐる。樹として何等の雅趣もなければ、沙地でも、瘠地でも、生存し、生長し、且つ能く根を張ると云ふ。聞けば静岡縣には二百年の齡ある老樹ありと云へば、内地には從來存したるものならむ。

尙ほ尾佐竹警察部長より、民情悪化の話聞いた。君は尾佐竹博士の令弟にて、有志の士と見受けたから、予も腹藏なく、現代政治批判の一斑を告げた。

此より漸次海岸線は、瀾望無際の沃野の中を駛る。此邊何れも臺中米の産地であらう。今や蓬萊——日本米を臺灣化したる——種が、殆んど臺灣全島に廣がり、米質も頗る改良せられたりと云ふ。沿道の光景は、宛も吾郷の松橋から八代邊を行くの心地がする。此の平原も古は滄海であつたらしい。行く／＼は更らに現在の干潟が又た平原となるであらう。追分にて松岡君夫婦出迎られ、一路臺中線に入る。臺中は海岸縦貫線には取り遣されたるが、臺中官民の熱心にて、特に追分から臺中に至る線路が出来、急行車は必らず臺中に立寄るととなつたと云ふ。

臺中は四顧皆山、中央山脈と、海岸山脈との間にある、臺中平野の略ぼ中央に位置し、面積一方里餘、如何にも落附きのある市である。之を小京都と稱するも、恐らくは過獎ではあるまい。

我等は官民の出迎諸君に挨拶し、直ちに松岡君の邸に入った。邸は市外の杜の内にある。何となく鎮守の森と云ふ趣きがある。予は主人公に向ひ、此家に入るには先づ柏手を打つて一拜せねばなるまいと、一笑した。

主人夫婦の待遇には、痛み入つた。我等は吾家に還つた心地で、安々と双脚を伸ばして眠つた。晚餐の馳走は、悉く主婦の采配にて、一同何れも満腹した。特に生蕃家鴨のスキ焼などは、別して珍味であつた。生蕃家鴨とは、鶏と家鴨との合の子とか云ふ。果して然る乎、否乎、兎も角も珍味であつた。

昭和四年二月十五日午前六時 臺中松岡君邸に於て。

途中既に田植が済んだる場所もあつた。只今予の机上には、自然咲きの牡丹花一鉢ある。

一九臺中見物

二月十五日は、臺中見物デーだ。早起松岡氏邸内を散歩す。何れも主人手栽の由なるが、我等の眼には極めて珍らしき木が天に參してゐる。就中在來の榕樹、恐らくは二百年も経たらんもの、一本の老幹より八方に枝葉を擴大し、獨り自から林をなしてゐる。

朝食後臺中神社に詣す、城内の池には、紅白の水蓮満開す。工藝傳習所に赴き、臺中公園より水源地を経て、行啓記念館に於て、本島及び臺中の物産陳列所を觀、師範學校に赴き、大岩校長の案内にて、生徒諸氏に挨拶し、更らに大岩校長の請に應じ、禁を破りて、講堂の額を書した。大岩校長は、予が著『國民小訓』

を科程書として使用しつゝあり。生面なれども、同志の士。附近は田植最中に、白鷺や、五位鷺が、頻りに田の上を去來してゐる。

それから村田俊彦君の主宰する蕉實検査所を過ぎ、帝國製糖會社に至りて、其の工場を視察した。此れは松岡君が發起したる會社にして、今や松方正熊君其の社長たり。それから州廳を訪ひ、生駒知事に面し、去りて市民館なる熊本縣人の驩迎會に出席した。

此地も熊本縣人は、優勢である。會者百餘名、予は平等觀、差別觀の調節宜しきを得たるを、中庸の道と云ふ所以を陳し。縣人會の必要なる所以を語つた。此れから臺灣新聞社を見舞うた。此れは宮島球川君が筆政を掌りたるもの、故人を懷うて、徂徠之を久らす。松岡社長以下社員諸君と社前に於て、撮影して相別れ、此れから刑務所を訪問し、松岡君邸に還り、主人の需に應じ、市民館の額面、

其他若干揮毫した。是れ主人の好遇に對して、聊か酬ん爲めである。

夜は生駒知事、小島市尹、坂本素魯哉、松岡富雄君等の發起にて、官民合同驪迎會に出席した。富貴亭の廣間にて、如何にも盛會であつた。小島市尹の熱心なる驪迎の辭ありて、予亦た少しく演る所あつた。それは世界大戰後、世界主義と、國民主義との二潮流あること、宣傳と現實との相違あること、日本人が無暗に他の宣傳に乗ること、臺灣統治の根本義は、堅實有力なる中央政府を建立すること、日本は政黨内閣の舊套を打破して、更らに一步を邁進す可き事等を、言葉短く語つた。

今朝は七時から當地を立つて、埔里に赴く筈なれば、先づ取り敢へず一日間の梗概を記して措く。

昭和四年二月十六日午前五時半 臺中松岡君邸に於て。

二〇 臺中より埔里に向ふ

二月十六日、去月の今日は、予が國民新聞社の社長として去りたる日だ。最近一箇月間に、幾許の變化を、予の一身に來しつゝある乎、それが又た予の一生に、如何なる影響を及ぼす可き乎、過去を憶ひ、將來を想ひ、感慨中より湧く。

午前七時零四分、臺中驛を發す。生駒知事、小島市尹、松岡君を始め、同郷の諸君、其他に見送られ、彰化驛にて、縦貫本線に乗り換へ、九時過ぎには二水驛に著した。途中滿目水田、芭蕉畑、而して芭蕉畑に雜ふる檳柑畑がある。桑原員林郡守の語る所によれば、先づ苗木を作り、鉢拔きのまゝ、畑に移植するから昨年の米田は、今日の檳柑畑となる。而して毎反の所得、多きものは、六七百圓に上ると云ふ。

二〇 臺中より埔里に向ふ

汎舟遊人

竹舍蕉圃送且迎。 水牛得得水邊橫。
倩誰描取眼前景。 想殺能詩賴子成。

過日本山松蔭翁が、九鬼隆一男を鎌倉に訪うたる砌り、談偶ま予に及び、人皆な蘇峰を現代の山陽と云ふ當れり。但だ詩山陽に及かざるを惜む。然も酒と女一に對して安全なる一の點もて、やゝ之を補ふに足れりと語られたりとか。偶ま之に想著して、此作を口占した。

春水溶溶滿野塘。 紅柑熟盡翠蕉香。

北人不解南中趣。 平田二月已插秧。

臺中以南は今が田植の最中だ。其の早きものは、早苗が既に風に戦いでゐる。

車中偶々臺中に於ける、松岡君邸の雜詠を作る。

四圍山色翠屏長。 蘊藉風光憶舊京。

庭上老榕三百尺。 樹陰相對說家鄉。

予家と松岡君の家とは、二世の通家だ。而して我等は少壯時代よりの相知である。

二水にては、二水總督と綽號せる増澤君、及び熊本縣人諸氏出迎らる。此處でも阿部驛長、伊東郵便局長、坂本校長、高本君など、何れも熊本縣人にて、予も何となく故郷に還りたる心地がした。

此れから汽車を乗り換へ、外車埕に至り、此處にて辨當を喫し。臺車に乗り埔里に著したのは、午後四時半を過ぎてゐた。埔里の宿は、日月館と云ひ、田舎には珍らしき清素であつた。庭前の木犀、今や満開にて、殆んど人を薰殺せんとした。

昭和四年二月十七日午前六時 虎尾大日本製糖會社俱樂部臺春館に於て。

二二日月潭

二水驛から外車埕の間に集々驛あり。此處は新高郡役所の所在地にて、三輪郡守來會した。此處から新高山への登山路が始まる。我等は汽車の窓から、双峰の雲表に抽んでたるを眺めた。

此の附近、山嶺、水涯、概して芭蕉畑である。此れは本島人が、勝手次第に耕作しつゝあるものにて、中には總督府にて、折角植林したる樟苗の間に芭蕉畑を作る者もあり、其の或者は、唯だ一個の鋤を手にして、山中に分け入り、幾年をも經ずして、數千金を懐にして、其の故郷に還りたる者ありと云ふ。兎に角漢民族の稼ぐには、世界何れの民族も、追ひ付く者がない。

外車埕から埔里に至る八里八町間の軌道臺車は、南溪角板山間の其に比すれば、頗る完全に幾きものだ。されど概して上り坂を推し行くものであれば、五城、魚地、大林までは時間がかゝる。併し大林から埔里までは、下りにて、實に眼が廻る程、自然の惰力もて疾駛する。魚地、大林邊は、何れも海拔二千數百尺、而して下りて埔里に至るも、亦た一千四百八十尺、臺灣の中央萬峰の中に在り。我等は狭き溪谷の窮まる所、洞門を過ぎ、端なく眼前に平原の展開せらるゝを見て、桃源とは斯る所にやあらんと、吾心を躍らしめた。

此の盆地は、全く播鉢の底にて、二方里の平地である。其中には水田あり、甘蔗畑あり、其田には早苗もあれば、植付以前のものもある。甘蔗畑には穂が槍尖の如く抽んで、成熟期を示してゐる。

此處は氣候も臺灣中にて、最善と聞けども、交通の不便だけが、申分がある。此程の土地を、殆んど全く封じ込みて置くのは、餘りに心外千萬だ。此には埔里の人々も、何とか憤發す可きであらう。

此處は梓にて製したる杖の名所だ。曾て明石總督が、此地を巡視して、梓杖二個を予に寄贈したるとを想起し、坐ろに故人を懷うた。而して古藤郡守亦た杖を携へ贈つた。予亦た若干を購ひ求めた。

此地に於ける有力者の一人、林醫師亦た同郷人だ。而して前に瑞穂丸にて同船したる坂元君とは、偶然此地に於て相見た。君は鹿兒島人にて、此地の有力者だ。

昭和四年二月十八日午前六時半 虎尾に於て。

二二大 林

二月十八日、今日は實に強行的道程である。午前五時五十分、埔里を發して、臺車に上る。大霧模糊咫尺を辨せず。暗中に官民諸氏の見送りは、如何にも心痛に存ずる。

七時半に大林に著した。如何にも好天氣だ。此處には臺灣電力會社の平田君出迎られ、我等夫婦は、各々四人擔ぎの椅子的轎に乗り、自餘の諸氏は、二人擔ぎの臺灣轎——何となく花嫁の乗物に似たる——に乗り、若しくは徒歩した。

我等は陂を過ぎ、阪を上下し、司馬按の水電事務所を斜に視、兒子田を過ぎた。此邊背に青山を負ひ、其の兩側に修篁を帯び、小高き所に、朱く塗りたる門があり、其奥に家根が出で、其の附近を竹笠を頂きたる農夫往來す。正に是れ一幅南畫である。憾らくは翠雲子をして、此の妙趣を看取せしめざることを。

斯くて急阪を下りて、日月潭の湖岸に著し、モータ船に乗り、湖面を徘徊した。湖を環る四山、何れも處女林である。何となく北海道の支笏湖の趣きがある。但だ水が聊か濁りてゐる。

我等は四手網を見て、漁翁をして之を卸さしめたが、唯だ扁平なる小魚二尾を得たるのみであつた。此れから向岸の化蕃に至りて、蕃婦の杵歌を聞いた。蕃婦幾十名、相合して、各々長短の杵を手にして、これを地上の石に叩きつけ、一種の音を發す。其韻清越、其歌悠揚。

彼女等は豫じめ予等の來訪を待ち受け、何れも滿艦飾をしてゐた。其の住家なども餘りに掃除が行き届いてゐた。蕃人學校でも、蕃女歌謠でも、既に一種の觀物化しつゝありては、博物館に赴きて、其の標本を見るも同様だ。されど見ざる聞かざるよりも、尙ほ優れりとす可きであらう。

去りて臺中州營の旅館涵碧樓に上りて、午餐す。此方からは日月潭の全部を見晴らし、眞に湖山の秀容を把るとが出来る。

剡舟一棹去迢迢。老大懈聽蕃女謠。

青嶂如眉湖似鏡。湖心水暖長魚苗。

剡舟は獨木舟のこと、湖面には何れもそれを使用してゐる。午餐の鶏の鋤焼は、生駒臺中知事の馳走と承り、遙に好意を謝して置く。食膳には別に湖鮒の刺身などあつた。而して食了りて偶然にも、丸茂交通總長の巡視と出會した。

二二 日月潭より二水驛

日月潭上の涵碧樓を辭して、椅子的轎に上りたるは、午後一時半であつた。此處は水社と稱してゐる。此から道路は處女林の中を貫いてゐる。木は概して内地の

徑に似てゐるが、何れも二十間乃至三十間もあらん。内地の木よりも、其の幹の長大なるが特色だ。而して其の幹の中段には、概して種々の寄生木がある。何やら名を知らぬ鳥が啼いてゐる。又た籐なども自然に生えてゐる。

斯くて臺灣名物の鐵線橋を過ぎ、急阪を下つた。上る時の苦勞もさるとながら、下る時の心配は一層だ。予は幾回か橋上から、轎夫の足元を眺め、南無阿彌陀佛を唱へたくなつた。されど兎も角も無事に三時半過ぎ五城に著く、先づ一息ついた。直ちに此から臺車に乗り換へたが、此れから外車埕までは、下り阪一方にて、其の疾駛は愉快の度を過ぎて、寧ろ心配であつた。此れにも拘らず、外車埕に著したる際は、發車時刻を、既に四五分も經過してゐたさうだが、特に驛長の好意にて待ち受け呉れたと云ふ。此れは途中にての撮影の爲め、斯く時間を後らしたのであつたとは、後で聞いた。今更ら恐縮の次第である。

五時五十二分、二水驛に著するや、否や、例の二水總督増澤君や、桑原員林郡守、及び同郷諸君出迎られ、直ちに増澤君の邸に入り、其の蘭科植物、及び其他の植物苑を観る。而して増澤君夫婦、及び伊東夫人、高本夫人、其他の接伴にて、晚餐の馳走に預る。此間約三十分、箸を投じて六時三十二分二水驛を發し、七時六分には斗南驛に著し、鈴木大日本製糖會社取締役、塚本虎尾郡守其他の出迎にて、直ちに社線に乗換へ、虎尾驛に著したのは、八時少し前であつた。

斯くて臺春館に入り、一浴の上、鈴木、入來、衣斐、庵地等幹部諸氏と閑談し、更らに増澤君邸の晚餐の二次會を此處に延長し、午後十時漸く了つた。卓上何れも珍味であつたが、特に西瓜は渡臺以來、始めて最も其甘さを覺えた。

此日は臺車や、轎や、舟や、輕便汽車や、汽車や、一日の中に乗物を交代する幾回なるを知らず、然して午前五時から午後八時まで、殆ど間斷なく奔走した。世

人曾て虞翁を嘲りて、『匆忙なる老人』と云うたが、予自身も亦た自から何の故に斯く忙がしく、漫遊せねばならぬかを疑はざるを得ない。

昭和四年二月十八日午前八時 虎尾に於て。本日は吾母第十一回の命日だ。

二四 虎尾

二月十八日、昨夜は實に明月であつた。虎尾停車場から、臺春館に至るの際、端なく『人影地に在り、仰で明月を見る』の句を想起し、古人の我を欺かざるを知つた。而して今朝も亦た旭日は硝窓に映じ、庭前の小川に、數百群の家鴨は、嬉々として相戯れてゐた。

臺灣には歐洲の『ジブシー』に類する一種漂泊の民あり、幾千百の家鴨を趁うて、臺灣を南北に上下して生活するものありと云ふ。而して其の南より北に達する頃

には、卵から食用期の家鴨に成長する頃になると云ふ。其の數尺の一竿にて、家鴨を指揮進退せしむる動作は、如何にも上杉謙信が青竹もて、三軍を指揮するの趣きがある。

虎尾は全く大日本製糖會社によりて成り立ちたる市街だ。我等は鈴木重臣君其他の案内にて、舍宅街を經、其の並樹——鳳凰木——の實に堂々たるを見、而して此れが二十餘年前には、全く一木なき荒原であつたとを聞き、如何に人力の造化を補ひ、天功を亮くるかを感じた。虎尾神社に詣し、明石總督手栽の樹が、漸く方さに拱を成さんとするを見た。此から小學校、會社工場、それから清交俱樂部の樓上にて、官民諸氏及び熊本縣人諸氏と相ひ會し、鈴木君の挨拶に對し予も一場の感想を語つた。鈴木理事は、實に典型的紳士、臺灣に於ける大日本製糖會社の今日ある、同君の努力によるもの、恐らくは多大であらう。

大日本製糖會社は、實に其の淵源を明治二十九年一月、故鈴木藤三郎氏に發し、爾來漸次に膨脹し、發展し、以て今日に至つた。其間には酒匂社長の負責自殺あり、所謂衆議院議員買収の日糖事件あつたが、一たび藤山雷太君の社長となるに及んで、頓に其の旗幟を一變し、以て今日の隆昌を致した。臺灣のみにても、一萬二千甲歩の社有地を有し、其の所有する鐵道も三百哩に達し、内九十八哩は營業線となつてゐる。

* * * * *

我等は清交クラブにて、午餐の馳走を受け、それより乗車す。鈴木君及び令嬢、林虎尾肥後會長など相送りて斗南驛に至り、此れから南北縱貫線に乗り換へ、嘉義に向うた。此日は頗る暑熱を覺え、扇を手離すとが出来なかつた。

二五 嘉義概觀

嘉義に著するや否や、佐藤郡守、枝徳二君、眞木街長、其他同郷諸君の出迎を受け、直ちに嘉義名物の隨一たる製材所に赴き、福本所長から、一切の作業を案内せられた。五百年乃至七八百年の樹齡ある大物を、大根か豆腐を切る如く、勝手に料理する手際は、實に面白かつた。此處では年々八萬石の材木を此の如くして處分すと云ふ。一石と云ふは云ふ迄もなく十六方尺のことだ。

* * * * *

此れから嘉義林業試験所に至り、熱帯諸植物の試植を見、轉じて農事試験所に至り、平間所長から、實物に就てそれぞれの説明を聞き、秩父宮の御休憩遊ばされたる小亭に導かれ、此處にて苑中に成長したる、レモンの水やら、鳳梨などに渴を潤し、甘藷の花や實や、其の實から生じたる蔓や、其の甘藷種改良の手續き等を見た。試験所の小丘には、偉大なる械樹の枝幹を中天に張りたるを見る。此れは定めて四五百年の物であらうと思ふたが、聞けば一百二十餘齡と云ふ、其の成長の速かなる驚く可きものがある。

大概臺灣に於ては、樹齡二十年になれば、既に物になる様だ。樟などは此の限りにあらざれども。それは地味に恵まれたる譯ではあるまい。但だ光と熱の爲めであらう。

此から嘉義神社に参拜し、嘉義ホテルに至り、一浴して、嘉義官民及び熊本縣人聯合歡迎會場なる公會堂に赴いた。此處では演説拔きの臺灣料理にて最も好都合であつた。献立は眞木街長の考案と聞いたが、如何にも氣が利いてゐた。

嘉義は今尚ほ街であるが、實力に於て、市たる資格がある。清國の康熙年間から開けたる土地にて、臺灣でも寧ろ舊臺灣に屬するもの、然も一方には阿里山の製材事業を控へ、他方には各會社の製糖事業を擁し、新式の市街として、頗る發達してゐる。而して其の鐵道は縦貫線以外、阿里山線其他各製糖會社の諸線相ひ

通じ、實に四通八達である。而して其の市街も、數十年前の大震災以來、市區改正が出来、衢區井然、却て禍を轉じて福となしたるものに幾し。

昭和四年二月十九日午前六時 嘉義ホテルに於て。此より阿里山に上らんとす。

二六 阿里山に登る

二月十九日、今日は此行第一の快心事たるべき、阿里山上りの當日だ。何よりも天氣に恵まれた。午前七時十五分に、嘉義北門驛を發した。嘉義營林所長福本君、總督府營林所の渡邊君等、案内役たり。有り難くも一車貸切りにて行く。

我等の前なる無蓋車の荷物の上には、生蕃の親子二人が便乗してゐる。十三四の生蕃娘が、其父に傍うてゐるのは、如何にもいじらしくある。可憐である。

竹崎まで約七八哩の間は、平地である。此れから山路にかゝる。木屐寮、樟腦寮を経て、彌よ獨立山頂を攀づることとなる。即ちスバイラル線に入る。此處では遮二無二急勾配のところを上るから、線路を螺旋的にくるくるつけてゐる。されば汽車窓から、凡そ四回樟腦寮の停車場を回看することが出来る。されど機關は後邊にあるから、煤烟に襲はるゝ心配はない。

途中には最初に荊竹の林があり、次には蔗竹の林があり、更に桂竹の林となる。荊竹はとげがある。最も繁殖力に富み、一節を切りて地にさせば、やがて新芽を吹く、本島人は之を防風林となし、家の城壁となし、而して家それ自身も殆んど此にて造作してゐる。蔗竹は其の幹巨大にして、筏を作るに妙、桂竹は日本の眞竹の類にて、此邊にては専ら製紙の用に供してゐると云ふ。

又た龍眼樹が、隨處に森をなしてゐる。此れは龍眼肉は勿論、用材として堅緻で

ある。沿道何れも總督府の造林がある。チーク樹、想思樹、シツク樹がある。シツク樹は朱檀擬ひの材として用ひらる。されど上るに隨ひ、満目只だ桂竹と云ふも不可なき程だ。

我等は此の如くして、獨立山を越え、梨園寮を過ぎ、見晴臺にて一寸車を停め、展望した。斯くて交力坪、水社寮等を過ぎ、奮起湖驛に達したのは十一時頃であつた。此處は阿里山鐵道の中間驛にて、小市をなしてゐる。警官派出所もあれば、旅館もある。嘉義を距る二十八哩、海拔四千五百六十四尺。されど停車場の附近には菊の残花もあれば、蕨が既に拳を突起してゐる。此の附近から専ら福州杉即ち廣葉杉が植林してある。

二七 阿里山途上

奮起湖から哆囉囉驛を過ぐれば、大塔山、小塔山は一大水成砂岩の山形をなして、眼前に横る。而して奮起湖までは、熱帯林にして、概して榕樹類であるが、此れからは暖帯林となり、櫛柯類の潤葉樹が多くある。何れも鬱蒼として千古斧を入れざる處女林だ。

此れから十字路驛を過ぐれば、愈よ蕃界に入る。此から平遮那驛を過ぐれば、山は暖帯林より温帯林に接し、針葉樹類の王國となり、先づ眼に入るものは紅檜である。紅檜は世界中、唯だ臺灣のみを産地としてゐる。其葉は普通の檜に類して、其の色や、赭、之を板にすれば、亦た淡紅色を帯ぶ。今日では扁檜と其の價格に甲乙なしと云ふ。

二萬坪驛は、嘉義を距る四十一哩餘、海拔六千五百尺、二萬坪の平地があるから此名がある。但し果して二萬坪あるや否やは知らぬが、山間の平地としては、先

づ廣々とある。此處から十六分の一急勾配となるから、八輛の車を六輛に減じて行く。此れからは紅檜、扁檜、及びツガなどの巨木が相ひ送迎し、所謂神木驛を過ぎ、神木を遙拜して行く。斯くて沼の平に至れば、意外にも市邑を見出した。嘉義から四十四哩、隧道を過ぐる七十二、海拔七千四百五十七尺。

我等は一切の手荷物を俱樂部に届け、更らに二哩七分を過ぎ、海拔七千六百九十一尺の塔山驛に至り、更らにガソリン機關車を運轉する小形の汽車に乗り換へ、約一哩を過ぎ、營林所派出所主任田村君の肝煎にて、伐木工夫の木登りを見た。此れは唯だ一條の繩と、其端に一本の小棒とを結び、それを樹身に投げかけ、それを階子として上り、追々とそれを繰り返して樹の頂上に達し、更らに其繩を手繰りて、地に達する作用にして、見るからに別段危険を感ずる程ではない。

此れから伐木作用を見た。樹齡五百五十年、長さ百〇二尺、之を材木とすれば四



十五石を得ると云ふの、其の倒るゝ様は、實に巨人の最後を見るが如く勇ましく、且つ凄じくあつた。此れから材木の集配作業を見、沼の平に還り、阿里山俱樂部の客となりたるは、既に午後五時頃であつた。

本日沿道にて最も珍らしかつたのは、山中處々に臺灣の緋紅が満開であつたことだ。而して俱樂部にて、ランプをつけ、石のストープに、檜や、紅檜を惜氣もなく焚き、而して下界は一面の雲海を現じ、上には碧天水の如く、唯だ闌干たる星斗と、一輪の明月のみ。

山深夜寂寂。 爐冷復添薪。

脚底雲千疊。 嶺頭月一輪。

昭和四年二月二十日午前六時 阿里山俱樂部の一室、爐火盛に燃ゆる處に於て。寒暖計五十二度。

二八 阿里山概観

今ま茲に一寸阿里山の概念を得る必要がある。阿里山は新高山の西側に連互起伏せる一團の大森林にて、面積約一萬二千町歩、其の最高峰は海拔八千八百尺、而して其の山脈は馬脊の如く、新高山に連つてゐる。

臺灣に於ける植物帯は、概して四分することが出来る。先づ熱帯林にて、阿里山を標準とすれば、約二千五百尺以下、即ち獨立山停車場以下は、龍眼樹や、榕樹、相思樹、キワダ、イヌビワ、芭蕉等の類が能く繁茂してゐる。次は二千五百尺乃至五千五百尺、即ち平遮那停車場邊迄は、暖帯林で、櫛、柯、及び楠仔類の常緑闊葉樹林が自然の林相をなしてゐる。其中には直線三四尺、枝下七八十尺に近きものも少くない。内地で云へば四國九州邊に當るところだ。

此れから次第に常緑闊葉樹が減じて、針葉樹帯となる。即ち五千五百尺乃至一萬尺、二萬平驛附近から紅檜、扁柏、亞杉、臺灣杉、梅、姫子松と云ふ順序で、次第に出で来り、然も時には相混生してゐる。兎も角も針葉樹として、最初に現はれ来るのは、紅檜の老木である。其中には樹高二十數間、幹圍六十尺のものがあつた。然も亞杉、梅、姫子松は約二割に過ぎず、其他は全く紅檜と扁柏にして、臺灣檜の名は、この二種によりて世に轟いてゐる。

阿里山伐木採材の營業を開始したのは、大正三年からで、昭和二年度迄搬出總高は、約二百四十萬石、而して昭和二年現在の針葉樹現在四百三十萬石、闊葉樹約三百五十萬石を剩し、更らに阿里山の峰嶺の、大學演習林の針葉樹も、伐採する筈なりと云へば、年十五萬石の生産として、今後十五年は持續せらる可しと云ふ。

此れと同時に、阿里山鐵道沿線六千町歩の造林面積、約百二十町歩を合せ、年々二百二十町に近い造林をなしつつある。就中福州杉、即ち廣葉杉と、吉野杉、鹿兒島杉は、何れも成長尤も迅速である。福州杉の如きは、十七八年にして幹圍平均三尺となつてゐる。但だ日本内地の扁柏は、其の成長頗る遅々としてゐる。

予は阿里山伐木を見て、たゞ木を伐るばかりが能事ではあるまいと考へたが、其の鐵道の沿線に、造林の行はれ、阿里山峰頭の伐木の跡には、新樹が、萱や篠の間から、其の亭々たる幹を出しつゝあるを見て、頗る人意を強うするを覺え、左の一首を口占した。

登登七十二洞門。古檜喬杉半斧痕。
寄語山靈浪莫恨。向榮新樹沿途蕃。

昭和四年二月廿一日午前五時半 嘉義ホテル電燈下に於て。

二九 阿里山を下る

二月二十日、阿里山の朝は寒かつた。予等は室内に於て、石造のストーブに惜氣もなく檜材を燃して暖を取り、ランプの火にて、紀行文を綴つた。海拔七千三百五十尺と云へば、斯くある可き筈だ。

午前七時半、俱樂部を發した。予と妻とは轎に乗つた。此れは普通の椅子でなく、腰を掛けて後に倚りかゝり、兩脚は紐にて軾に繋いである小板に踏み掛くるものにて、支那泰山に於ける轎に類してゐる。尤も輕便にして、且つ尤も乗り心地がよい。擔夫は二人にて、二本の棒を、各々兩肩に擔ひて行く。

我等は新高山登山道路を横りて、二十四町を上り、祝山に至つた。此處は海拔八

千二百六十三尺、阿里山主峰を中心として、一萬尺以上の山凡そ十三を一眸の中に鍾む。其側なる仰高臺は實に四千尺の斷崖絶壁にて、泰山の捨身巖も、此れ以上ではなす。

我等は此處にて飽迄高山氣分を味ひ、山を下りて、沼の平に至り、先づ阿里山神社に詣し、學校を見、阿里山寺を経て、所謂神木の側に出でた。

神木は紅檜にて、樹齡三千年、目通周圍六十四尺、枝下長さ四十五尺、材積千八百石、之を伐れば、其株は約二十疊敷となる。如何にも巨木である。其の附近に第二の神木あつたが、今は焼けて、唯だ空洞の一部を存するのみだ。此邊の木、何れも千年以上、材木としては餘り老齡は、好ましからずと云ふが、我等の眼からは、巨木には何やら神靈が宿りてゐる心地がする。

我等の汽車には、狩から還り来る生蕃八名が、隣りの無蓋車に乗り込んでゐた。此れは全く無賃の客であると云ふ。彼等は蕃刀を帯び、獵筒を携へ、特に弓と矢とは、我等に取りては別して珍らしかつた。其弓は竹であつたが、矢根は鐵の矛形をなし、其の兩刃はヤスリの如くあつた。但だ獲物は一も無かつた様だ。

山上の寒さに引き代へ、山腹の熱は八十度を越えた。我等は上衣を脱し、扇を揮ひ、午後四時に嘉義に著した。而して同夕は眞木街長等の厚意にて、本島人の瑞鳳祥麟の舞を見た。就中獅子舞に至りては、尤も興を惹いた。

昭和四年二月廿一日午前六時 嘉義ホテルに於て。今日は此から臺南に赴かんとす。

三〇 嘉義より臺南

二月二十一日、午前七時三十五分嘉義を發して臺南に向ふ。やがて畑の中に標石

の突起を見る。此れが北回歸線の分界だ。此れから彌よ熱帯に入る。

沿道は一望無際、實に廣漠だ。漠の字を添へたのは、地味臺中地方に比して、如何にも瘦せてゐるからだ。滿地甘蔗畑、田は所謂看天田とて、雨が降らねば植付が出来ないから、切株のみ残りてゐる。之を嘉義以北の植付最中と比較して、如何にも貧弱に感ずる。

此中に於て獨り大なる煙突より煙を吐きつゝあるは、製糖會社の工場あるのみ。此邊は明治製糖、臺灣製糖の勢力範圍らしく思はれた。而して鹽水港製糖會社の直營にかゝる、大農式甘蔗畑の如き、亦た旅客の注意を惹くに足る。

九時三十七分臺南驛に著するや、官民及び熊本縣人諸氏に出迎られ、直ちに横光内務部長、松尾市助役等の案内にて、臺南神社を參拜す。此處は官幣中社にして、

北白川宮能久親王を祀りてゐる。而して神殿の後に廻りて、親王の薨去遊ばされたる御室、御寢臺、御寢具、其他當時御携帶の軍用靴、途中御使用の擔架などを拜見し、感慨轉た深きものがあつた。轉じて孔子廟に赴き、其の祭典の當日として、一切の準備が整うたるを幸ひに、悉く之を觀た。但だ大牢、小牢の牲として、牛や羊や豚が、生のまゝ、血を流し、臟腑を出して、壇前に供へつゝあつたのは、如何にも殘刻らしく見受けた。明年からは備、備羊豚に改良したら如何と思ふ。若し肉を頒く必要あらば、それは肉屋より購ふも可ならん歟。

祭典見物せんと思つたが、炎熱久しく石壘の上に立つに堪へ難し、それも唯だ三拜九拜の式のみなれば、失敬して此から龜碑を見る。此れが乾隆年間臺灣平定の紀功碑にして、漢滿兩文にて、九個の大石碑が駢立してゐる。轉じて累々たる墓石を徑して、五妃廟を見る。五妃は寧靖王の五人の妃が、王に殉したるを合祀したのだ。其側に一大榕樹がある。其蔭には千人を坐せしむ可し。

此から郊外なる開元寺に赴く。此處は鄭成功の妻董氏養老の邸にして、その儘寺としたるものと聞く。主僧は日本語を操り、極めて氣轉の利きたる案内振りなれば、貴僧は定めて内地に留學せられたるならんと云へば、然り私 は名古屋生れであると答へ、何となく禪の問答らしかつた。此處では鄭氏時代の古井を見た。

此れから開山神社に詣した、此れは鄭成功の廟を、開山神社と改めたものだ。即今修繕中であつた。半ば日本人の血を享けたる鄭成功も、延平郡王としてよりも、開山神社としての方が、満足であらう。予等が柏手を拍つて禮拜したのは、彼に取られても決して不快であるまいと思つた。

三一 臺南見物

市公會堂の熊本縣人諸君の午餐會に赴けば、樓上には臺灣に關係多き書畫、骨董の類、及び明治初期の史料など陳列せられてあつた。満座の諸君、何れも欣々とて予等を遇せられ、眞に家郷に還りたる心地がした。而して此から臺南安平間の運河に沿うて、鹹水養殖試験所に赴いた。此處は二十萬坪に餘る面積にて、盛んに虱目魚を養殖してゐる。別に鱒や、蟹や、蝦の類もある。されど主としては虱目魚だ。此れは寸餘の魚苗を此地に養ひ、一年餘にして其の長大なるものは三尺となる。即今の産出實に二百萬圓以上と聞く。其の養殖の方法たるや、池面を干して、それに肥料を施し、其の肥料から蟲がわくに際し、潮水を導き池となし、魚を其中に投じ、之を魚の肥料とするもの。されば予は一見此れは鹽漬ならんと思つた。予は斯く迄多量生産の魚に虱の字を冠するは、面白からず、何とか改名しては如何と發議したが、然らば先生之を撰定せよとのことにて、他日を約して去つた。

* * * * *

此れから安平製鹽會社に赴き、其の作業を見、和蘭人の遺蹟たる赤嵌城址に上り、濱田彌兵衛の事を偲び、赤錆びたる清國嘉慶年間の鐵製の大砲を撫し、和蘭人のバタバヤから齎らしたりと稱する磚の破片を拾ひ、安平港を一覽し、臺南なる赤嵌樓に上つた。此れは西曆一六二四年、和蘭人の建てたるプロビデンチア城址にて、一に紅毛城と稱してゐる。鄭氏の世には火藥庫となり、乾隆年間には安平縣署の一部を移し、今は海神廟と文昌閣とになりてゐる。

轉じて關亭廟、媽祖廟を見舞ひ、臺南公園を快駛し、始めて吾宿なる東屋にて汗を流したるは、既に五時半を過ぎてゐた。而して六時半から又しも市公會堂に於て、官民諸氏の驩迎會に招待せられ、之に赴いた。然も臺灣料理にて、獻酬の心配もなく、津田毅一翁、富地臺南新報社長、遠藤市尹、許廷光などの諸君と談笑して、一夕を過したるは、眞に愉快であつた。

* * * * *

臺南は實に史的氣分が濃厚である。予はせめて今日此地にありて、徐ろに懷古の情を暢べたいと思うた。臺南は眞に愛すべき地である。

昭和四年二月二十二日午前六時十二分 臺南東屋に於て。

三三 嘉南大圳

二月二十二日、午前七時三十五分の汽車にて、臺南を發し、昨來の道を番子田驛まで戻る。臺灣の鐵道は、單線にて、兎角發車時刻は後れ勝ちだ。此の旅行の經驗によれば、五分十分の後れば、殆んど當然の事と認められてゐる。

番子田驛には嘉南大圳の管理者枝君、技師八田君など出迎られ、直ちに大圳線に乗り換へ、烏山頭の事務所まで輕便列車にて向うた。沿線の地は所謂看天田、即ち雨を見て田植をする土地のみにて、如何にも瘠地らしく見受けらる。而して

途中約三百年前、和蘭人の移植したるマンゴー樹は、蓊鬱として林をなしつゝ、あるを見る。和蘭人の勢力は、此邊まで波及したるものであらう。

此れから自動車にて事業展望所に至り、八田君から實際の作業に就て、それぞれ説明を受けた。極めて大雑把に語れば、嘉南大圳は、看天田約十五萬甲（一甲は約一町歩）に灌漑し、是等の土地を一年は水田、一年は甘蔗、一年は雜作として輪作せしむるものにして、其の經費は四千八百十六萬餘圓、最近五百三十五萬圓を追加したれば、合計實に五千三百五十一萬圓となる。而して其の事業は大正九年九月に著手し、昭和四年度の終りを以て完成する由にて、現時既に濁水溪を水源とする、北港溪以北の五萬圓二千三百餘甲には、大正十三年以來順次灌漑を開始し、其の効果を收めてゐる。

烏山頭の約十萬甲に灌漑するものは、曾文溪の水と、其の流域の雨量とによるも

のにして、其の貯水池たる官田溪の堤防は高さ實に百六十五尺、頂部延長七百間、底部巾一千尺、頂部巾三十尺、實に其の土沙を持ち運び、それを水力にて壓洗し、漸次積み上げつゝある作用は、目覺まじきものだ。

事業主任八田君は、二十五歳にして帝大工科を卒業し、直ちに臺灣に來り、本年四十九歳と云ふ、即ち其の一半生を臺灣に送りたるもの、其人其勞、洵とに嘉す可し。

予は堤防の中流に舟を浮べ——一千尺の兩側から土砂を盛り、水力にて壓洗するから、自然に中は川の如く、以て舟を浮るに足る。本年末には此川は突起して、堤防の中心となる可きもの——其の作堤の模様を見、更らに工事中、石器、土器の類を掘り出したる地域に於て、採集をなした。地層に黒き數寸の一線を劃し、其中には土器の破片など續々と出で來つた。但だ石庖丁などの類ある由なれども、

それは見當らなかつた。斯くて展望臺にて、辨當の馳走を受け、又た番子田驛に引き返し、一路臺南を経て、高雄に向うた。

三三 臺南より高雄

臺南から高雄までの地味は、最も甘蔗の糖分多くして、當業者に驕迎せらるゝ由、此れは雨量少く、光と熱とが多き故であらう。高雄に近く頃には、未だ青田と云ふ程ではないが、早苗が風に戦いでゐた。植付を済して、既に一個月も経たらしく思はれた。

午後二時半停車場著、太田知事、齋藤市尹等及び郷友諸氏に迎られ、直ちに市尹の案内にて、港口に至り、更に説明者長尾技師と共にランチに乗り、港口を出で、其の防波堤の邊から、更らに港内を殆んど一巡した。

高雄の活力は、頗る旺盛、岸壁には約七隻の汽船が繋がれてゐた。灣内にも汽船や、大小の戎克が、無数であつた。今は砂糖の季節とて、船は何れも其の運搬の爲めであらう。尙ほ西瓜が、港に面する倉庫に山積してあつたが、此は東京に直送するものと云ふ。

此れから上陸し、壽山に上り、貴賓館に至り、庭上から高雄市及び其の港灣を、双眸の中に收め、今上陸下の、攝政殿下として、御一泊あらせられたる御室を拜觀し、茶を喫して去り、更らに上層なる高雄神社を参拜し、市中を一巡して、一浴するや否や、再び壽山の下西仔灣の海水浴場なる官民の驪迎會場に赴いた。

長風萬里我襟を吹き、落日は海波を射りて、其色黄金色より、深紅色に變じ、其の漸次海中に没するの光景、正に是れ一幅造化の大作と云はねばならぬ。

予は齋藤市尹の挨拶に對し、高雄は今や午前九時頃だ。其の希望は前途にあり。築港完成の曉は、更に高雄のみと云はず、臺灣全土の血の巡りが、善くなること信ずる旨を告げた。而して御馳走の第一としては此の風光絶佳の場所、第二には卓上に、あらゆる南方の菓物の標本を、陳列せられたる厚意を謝した。而して我等は見るのみでなく、是等の珍菓を試食した。

壽山は一名猿山と云ふ。猿猴尤も多く、種々の悪戯をなす。現に貴賓館の避雷針の如きは、數個の狙公相ひ群りて、之を搖かしつゝあり、即今一棟は漸く修理を了したるも、他の一棟は此の如しと、其の半ば傾きつゝある避雷針を、留守居のお婆さんは指し示した。併し我等に取りては、是亦一興、悪戯は兎も角も、猿猴なども、成る可く驅逐せざる様ありたしと、市尹まで希望を陳し置いた。従來は舟に乗るか、然らざれば壽山の半腹を躰えねばならぬところを、昨年來隧道を

通じた爲め、高雄市から此の西仔灣の海水浴場にも、容易に往來が出来、至極好都合にて、夏分には——四月乃至十月——臺中、嘉義邊からも、來遊者少からずと云ふ。左もある可し。但だ鐵道の複線と、自動車道路の修築が、尤も望まじき一である。此れは高雄海水浴場の爲めのみではない。臺灣全土の問題として。

昭和四年二月二十三日午前六時 高雄市吾妻旅館に於て。高雄は今が冬期と申すも、室内八十度にて、外出すれば、流汗淋漓、坐るに東京の寒氣が慕はしくなつて來た。

三四 高雄より鷺巒鼻

二月二十三日、今日は彌よ臺灣の最南端に達する日だ。午前八時三分高雄を發して、屏東線に乗り、一路稻田蕉圃を経て、九時三十四分潮州驛に至り、直ちに郡守津下猪太郎君の案内にて、自動車にて鷺巒鼻燈臺に向ふ。一路平坦、梅檀樹の並樹は既に花を開いてゐる。満目甘蔗畑にして、何れも臺灣製糖の勢力範圍と聞

く。山本二峰君經營の勞想ふ可し。

やがて木麻黃の並樹となり、彼是二十餘里、斷又續。木麻黃は葉は木賊の如き針葉樹にして、其の成長尤も速かに、且つ鹽風に耐ふると云ふ。我等は右に海岸に沿ひ、左に山を望みつゝ行く。朱一貴の亂に、此地の廣東人等が防戦したるを、清帝が褒賞したるを表彰する褒忠門を過ぎ。乃木將軍が明治二十八年十月十一日に上陸したる、枋寮の記念碑を過ぎ、十一時頃南勢湖の警察派出所に至れば、街道に沿ひ、小亭を設け、花木清雅、恰も一個の花園の趣あり。小亭は街道を隔て、直ちに海岸に接す。滄海渺漫一望際なし。我等は亭側のタンクから水を汲み、顔を洗ひ、辨當を使うた。山口警部、田中巡查夫婦、迎接尤も到れり。田中巡查夫婦は、何れも熊本縣八代郡の生にて、花園の主である。山口警部は生蕃語を善くし、蕃人來襲の際に於て、九死一生を得たる老功者である。折節田中巡查が、今日釣れたとて、新鮮の刺身を饗したるを、何れも快喫した。而して更らに

木瓜が盤に上つた。予は二個までも喫した。御禮には明日歸途に、何か書くからとて、墨を摺り置く可く申し残した。

恒春郡境にて、津下郡守と分れ、平賀警部出で迎へ、同君の案内にて、一路恒春に至り、此處にて西村郡守其他に迎へられ、更らに大板埒に至れば、今朝二頭鯨が取れたとて、恰も料理最中であつた。松井主任の所説によれば、昨日も二頭取れたと云ふ。

此れから懇丁寮に於ける先住民の遺蹟を見た。磨製石斧、打製石斧、土器の破片、及び種々の貝類を採拾した。場所は道傍の畑にて採集には何の苦もないが、餘りの熱さにて、大抵にして切り上げ、約二十七里を、一氣に自動車にて快駛し、日本帝國の最南端鷺鑿鼻の燈臺に著きたるは、午後二時半前後であつた。

三五四重溪

鷺鑿鼻の燈臺では中村所長から、其の尤も誇りとする木瓜を饗せられた。同行の須佐美君が、高雄から携へ來れる西瓜をも喫した。汗を拭ふ間もなく燈臺の最上層に登り、展望した。天晴れ氣清く、眼前には捕鯨船の徂徠する以外、唯だ漂渺の際、紅頭嶼を認むるのみ。此れから無線電信所に至れば、同郷人長谷川局長途中まで出迎へ、同君の案内にて、高原を縦横に馳せ廻り、臺灣の西海岸と、東海岸とを、一時に双眸の中に收めた。歸途燈臺に至れば、中村主任指點して、彼處に鯨か潮を吹きつゝありと云ふ。立ち留り見れば、今や捕鯨船と鯨とは、互ひに秘術を盡して勝負最中だ。鯨は巧みに逃んとし、船は之を追かけつゝある。

歸途は恒春種畜場に立ち寄り、帖佐所長から印度種と、臺灣原種との雑種牛の蕃殖の現況など示され、新鮮の牛乳にて湯を醫し、明治七年征臺の際、西郷都督の本營龜山を過ぎ、車城を経、西郷都督の名により碑文を誌したる、生蕃に虐殺せられたる琉球藩民の墓を弔し、更らに四重溪を経て、石門に抵り、當時苦戦の状を緬想した。

石門は呼んで字の如く、兩崖竝立、宛も門をなしてゐる。其下は四重溪の碧潭が廻縈してゐる。暮色蒼然、偶々蕃刀を帯びたる生蕃の童兒二人、淵を涉りて山中に入るを見る、蓋し蕃社に還るものであらう。所謂牡丹社は、此れから三里の山奥と云ふ。

四重溪に至れば、正しく午後六時、取り敢へず温泉に一浴した。當夜は舊曆十四夜にて、明月皎々碧天に懸り、蛙鳴、蟲聲四壁に滿ち、何とも名狀し難き快味を

覺えた。

一碧高天大月明。蛙聲閣閣雜蟲聲。
恒春二月輕衫節。客倚籐牀詩未成。

温泉は無色透明にて、眞に骨までも洗ひ清むる心地がした。西村郡守の來り携へたる鴨やら、前に大板埒にて見たる鯨の雜物や、其肉の刺身や、又た宿の主人が前溪に釣りたる鮓の天ブラやら、種々の珍味が盤上に列せられた。而して主人濱津君亦た熊本縣玉名郡の人、夜は郡守とは郡政を語り、主人とは釣を語つた。主人は附近に於ける川釣り撰手である。

昭和四年二月二十四日午前六時半 四重溪温泉に於て。

三六 北上の途に就く

三六 北上の途に就く

二月二十四日、本日は愈よ踰を廻らして北歸する日だ。臺灣漫遊も漸く其の時を越した。四重溪の一夜は、實に靜なる一夜であつた。起き出づれば、夜來の大月は、尙ほ皎々として、一天水の如し。

西村恒春郡守とは、郡界にて別れ、南勢湖の駐在所に至れば、津下潮州郡守は待つてゐる。前日の約束通り、田中巡查の爲めに、扁柏の板に、「潮來天地青」の大字を書す。此句は吾ながら場所柄に相應すると信ずる。若し亭號を撰まば、潮青亭と稱す可し。警吏派出所に潮青亭も亦た妙ならずや。忙しく西瓜と木瓜とを喫し、更に自動車を驅る。

色同牛酪漿尤滋。形似甜瓜香更奇。

艷説荔枝三百顆。坡仙此味不曾知。此れは木瓜を咏じたるもの。東坡先生が「日啖荔枝三百顆。不辭長作嶺南人」を揶揄したるもの。

潮州驛には豫定より十分早く著した。津下郡守相送りて西勢驛に至る。屏東驛に著すれば、武田郡守、渡邊街長、平山臺糖取締役、村田青果會社社長、及び同縣の諸氏出迎へられ、直ちに大觀亭に赴き、午餐の馳走を受く。時計を眺めつゝ、ナイフとフォークを使用す。渡邊街長の挨拶に、予答へた。渡邊君は「將來の日本」から、「昭和一新論」「中庸の道」まで、通讀したる一人である。座中特に此地名物の胡蝶蘭を飾り附けられた。

卓上の菓子皿に、手を著くる隙なく、勿々諸君に擁せられ、公園を貫き、胡蝶蘭を賞し、屏東「阿緞」神社を參拜し、村田君の案内にて、林綿順氏の芭蕉園に赴き、バナナの發生より成熟までの現狀を見、轉じて臺灣製糖會社に赴き、先づ瑞竹の叢を拜觀す。此れは先年今上天皇の攝政王殿下として、御渡臺の砌り、便殿に供す可く、蔗竹の柱を、臺中より取り寄せたる、其の枯竹の節から芽を生じ、

それを移植して此に至りたるもの。而して其中の一株は花を開らさ實を生じ、其の實地に墜ちて、更らに幾株の新苗を生じ、それを更らに移植して、別に一つ竹林をなしてゐる。尙ほ臺臨記念館を拜見し、此れより工場を一巡す。工場整頓規模宏大、前社長山本二峰君の勞想ふ可し。乃ち瑞竹拜見の所感一片を二峰君に電致し、停車場に至れば、汽車は正さに發せんとしつゝある。我等は倉皇橋を上下したが、一行の若者達は、線路を横ぎりて、漸く汽車に飛び乗つた。此れが短かき時間に、多くを視察せんとしたる報いである。

三七 屏東と鳳山

屏東は砂糖、米の本場である。芭實之に次ぐ。附近に四十萬坪の飛行場を有する飛行聯隊がある。一切の物資は汽車にて高雄に輸送してゐる。されど自動車路が未だ開通せざるは、如何にも残念だ。

此れから日本第一の長橋と稱する五千〇〇七呎の鐵橋を渡り、鳳山驛に著すれば、細井郡守、橋本鳳梨會社取締役其他に迎られ、直ちに曹公祠前に至つた。此れは當地方の一萬數千甲に、灌漑の用水渠を開鑿したる鳳山知縣の曹瑾を祠りたるもの。鳳山は臺南と共に、南部臺灣の古都である。其の市街なども、殆んど從前の支那街たる面影が存してゐる。南臺一帯の本島人が、結婚用具などは、概して此處にて其用を辨ずと云ふ。左もありなん。城隍廟などもあり、群集雜沓、支那流の人形芝居などもあつた。

橋本取締役案内せられ、鳳梨罐詰會社に至り、其の作業と、鳳梨畑とを見、鳳梨の馳走になり、無線電信所の長柱を眺め、自動車にて一氣に高雄に向ふ。

道は所謂縦貫道路にして、廣けれども、破損の場所少からず。路塵濛々、咫尺辨じ難し。午後五時前高雄に著し、一浴、一假睡、やがて熊本縣人の驢迎會に、西仔灣海水浴場に向ふ。場所は去る二十二日の官民驢迎會場である。然も來會者は寧ろ多かつた。中には縣人ならざるも、縁故者として加入せられたる諸君もあつたと云ふ。

本田女學校長の挨拶に予は答へて、我等熊本縣人は、職業に於て、趣味に於て、凡有る點に於て、各自主持する所あるも、歴史的に見れば、尊皇の精神、忠義の志趣に於ては、其揆を一にしてゐる。乃ち菊池氏以來、加藤清正に至り、細川家に至り、富田、本木、長岡、其他の諸先生に致り。特に横井小楠の如きは、世間から種々の誤解を受け、その爲めに慘禍に罹りたるも、然も其の尊皇愛國の精神は、今上天皇即位の御大典に際して、識認せられ、正三位に叙せられた。されば吾人も此の熊本の傳統的精神を把持し、擁立し、以て大いに前輩に酬いねばなら

ぬと語つた。

此の會合に於て、最も予等を感謝せしめたのは、其の献立が悉く熊本流義であつたことだ。何から何まで一切の熊本式の料理にて、熊本に還りても、とても斯る馳走は六ヶ敷と思ふ程であつた。諸君の好意、實に感謝す可し。

昭和四年二月二十五日午前七時 高雄吾妻旅館に於て。

三八 高雄より鹿港

二月二十五日、早起餘儀なく塗鴉數葉、午前九時十分急行車にて高雄を發し、北歸の途に上る。太田知事、齋藤市尹、同縣の原田、白石其他の諸氏及び夫人達相送る。此日は天候聊か變態を示す。されど車中は蒸し熱く、煽風器は頻りに廻轉しつゝあり。岡山驛にて須佐美君と相別る。君は豫て書面のみにての知友であつ

たが、這回は予等の爲めに、周旋尤も竭めたる一人である。

車中にては今朝落手したる『改造』四月號の『蘇峰自叙傳』を校正した。車中動搖、端なく山陽が輿中に於て、詩稿刪定の事を聯想す。

臺南、嘉義にて、それぞれ停車場まで出掛けられたる諸君に別れ、午後一時四分、員林驛にて、桑原員林郡守、及び夫人、今井彰化郡守、臺中の松岡君及び同縣の諸氏に出迎られ、直ちに郡守の官舎に入り、頃ろ阿里山の奥から捕へたるミカド雉子を見、其の愛培したる蘭科諸植物を見る。夫人は故土井香國翁の姪にして、細川瀏翁の女、瀏翁は新聞記者としては予の先輩だ。十五六歳の時、屢ば翁の文を『東京日々』紙上に見て啓發したることを記憶す。曾て臺南に於ける宴會の席上、翁の列席したるを知らず、遂ひに膝を接して往事を談ずるの機を逸し、深く憾とした。乃ち夫人に託して、存問の意を通じ置いた。

斯くて改良の豚舎及び芭蕉園を見る。豚は純バークシヤ種にして、其他食用兎、皮用兎、及び産卵用の鶏舎等を見る。豚の食料には豆粕を與へ、其の排泄物を芭蕉園の肥料となすと云ふ。此れが則ち一舉兩得と云ふ可きものであらう。

員林方面は、尤も集約的農業行はる。寸土尺地も、其の地力を盡してゐる。竹林の中には、芭蕉園あり、芭蕉園の隣には、椪柑園あり。此邊の地價は一段歩六七百圓と云へば、内地に比しても、決して廉價ではあるまい。而して椪柑園からは、一段歩にて、五百圓乃至千圓の収入を得るもの少からずと云へば、農民の富實なる以て知る可し。

我等は永靖庄の庄長陳慶雲氏の邸に入り、其の北白川宮親王殿下の御宿泊の遺跡を拜觀し、其の模範的椪柑園を見、此より桑原郡守と相別れ、今井彰化郡守の

案内にて、鹿港に向うた。

三九 鹿港概観

此頃より天候彌々險惡となり、疾風は殆んど自動車を吹き飛ばさんとし、遂ひに雨さへ挟んで至つた。午前中扇風器を假りたる我等は、今や毛布を頭から被りて、寒氣を防がねばならぬ始末。天候の反覆も、人情の反覆以上と云はねばならぬ。

溪口を経て鹿港に著したるは、既に四時頃であつたらう。鹿港は鄭成功の渡臺以前よりの港にして、對岸なる厦門との貿易は、専ら此の港を経由したと云ふ。市街は狭くして、東京の芝日影町程もなく、先づボンペーの故址同様、一間半位であらう。街路面は煉瓦にて疊み、上には板屋根を葺き、雨中でも日中でも、日よ

け雨よけなくして、往來が出来るやうになつてゐる。

予は鳳山の市街を、最も支那風の舊態を存したるものと觀たが、鹿港に至りて、更らに其の然るものあるを觀た。公會堂の前にて、當地の官民、及び同縣人諸君、別けて臺灣きつての名物辜顯榮翁、及び其の一族諸君に迎へられ、望樓に上りて、遠く鹿港の港灣を眺めた。従前は千石船が此の附近まで出入したと云ふが、今や碧海變じて沙丘となり、稻田となり、港は一里餘の先きに推し出し、然も漸く若干の戎克の出入するのみにて、一個年の輸出入も極めて僅少と云ふ。

我等は辜顯榮翁の堂々たる邸宅に赴き、特に豫期せざる御馳走を享けた。翁は豫じめ予等の來るを知り、前日臺北より來りて、此處に待ち受けたりとて、其の接待至らざる所なかつた。今井彰化郡守は頻りに其の前途を急ぎ立てたから、我等は残り多くも箸を措き、翁及び其の一族の方々に別れ、一氣矢の如く彰化に赴き、

農業倉庫を見、彰化神社の前に予等を待ち受けたる、同縣人諸君に挨拶し、彰化神社を参拜し、今井郡守と相別れ、臺中の松岡君邸に入つたのは、既に午後六時半に近かつた。

予等は去る十六日松岡君邸を發して南行し、十日目に還り來つた。予等の面目が漸く臺灣色を帯び來つたと、松岡君夫婦から證狀を受取つた。既に辜顯榮翁の許にて、一通りの晚餐は喫したが、更らに松岡君邸に於て、令夫人の手料理にて、第二次の晚餐に有り附いた。

昭和四年二月廿六日午前六時十五分 臺中松岡君邸に於て。

諺に豫言者故郷に飲まれずと云ふ。予は固より豫言者でない。且つ熊本縣人として、熊本縣に何等の功德をも無い。然るに臺灣に於ける同縣の諸君は、知ると知らざるとに論なく、予等の爲めに離迎會を催はし、予等の爲めに物を貽り、其の懇款を極む。寔とに恐慚慚愧の至りである。然し諸君の厚意

を無にするも、心なき業なれば、有り難く之を受くるとした。

四〇 重ねて臺中に抵る

二月二十六日、臺中松岡君邸に於ては、夜來談笑興に入つた。松岡君の家と吾家とは、二代の通家だ。而して君と予との間に、共通の一友人がある。其人の消息に接せざる十數年。相共に舊を語り、悵悵之を久らす。

早起直ちに松岡君の爲めに、禁を破りて數紙を書す。墨精毫佳、覺えず數十葉に至る。唯だ發車の時間が、偶然にも後れたる爲め、午前九時二十二分臺中發の急行に間に合うた。我等は來時海岸線を取りたる爲め、去時は山間線を取つた。ト
ンネルの多きは、山間線の缺點の一だ。

四〇 重ねて臺中に抵る

車行北するに従ひ天氣濛々、宛も内地五月雨の頃に似たり。臺中は臺灣に於ける氣象上の分界點にて、其の以南と其の以北とは、丸るで別乾坤の趣きがある。

午後二時二十四分、臺北停車場に下れば、諸友出で迎へられ、何れも予等の行程の、滞りなく相ひ濟んだるを祝せられた。或る高官は、お祖父さんやお祖母さんを迎ふるつもりで出で來たと申された。而して予等の顔面の著しく臺灣化したるに、何れも驚きつゝあつた。臺灣化とは日にやけたることである。

到着後は客を謝して、東京に於ける文債を片附けた。債務の中にも、文債は、旅行の興味を殺ぐ大方ならず。されど既に債となれば、之を了せざれば、更らに
より多くの苦痛を感ず。

斯くて同行者が購ひ來れる馬場恒吾君の『徳富蘇峰論』を一讀した。實は今少し

く手緊しく切り込まるゝこと、覺悟してゐたが、餘りに寛裕なる筆鋒にて、却て痛み入つた。惟ふに馬場君も餘程斟酌せられたものであらう。併し精讀者は、之を見て如何に馬場君が、予の長短得失に就て、其の所見を語つてゐるかを察するであらう。馬場君は如何なる場合でも、曲筆の出来る人ではない。但だ何人に對しても、何事に就ても、善意に解釋する美質、若しくは美德の持主である。

本日から明日は、臺北附近を逍遙するつもりだ。予等は臺灣を去る日の、日一日
迫りつゝあるを、名残り惜しく思ふ。

昭和四年二月二十七日午前六時半 臺北鐵道ホテルの一室に於て。

四一 林家の訪問

二月二十七日、午前九時臺北鐵道ホテルを發し、自動車にて板橋に向ふ。淡水河

を臺車にて渡り、更に自動車にて、林氏の邸宅を訪ふ。此れは臺灣第一の富豪林維源氏が、清朝道光の末年に築造したる大庭園にて、其側なる林氏五房の住宅地を敷れば、其の面積約三町となる。一萬坪足らずの庭園は、日本内地では、珍らしからぬが、支那では庭園と云へば、建物が主にして、それに池とか、花壇とか、木とか、石とか、小徑とかを添ふる迄にして、先づ一萬坪の家と見る方が、分りが宜い程である。

案内には林家の一人、林熊光君が同伴した。君は帝大出の新人にて、書籍蒐集者として、予も屢々東京の文求堂邊りにて接見したる舊知である。林氏五房と云へば、其の五人の兄弟が、棟を並べて住みたるものにして、今は何れも財産を分配し、それぞれ別居しつゝあれば、此の大邸宅大庭園は、無住の姿となつてゐる。併し此家を保存する爲め、一箇年十萬圓(?)を費してゐるとか。若し内地流の賃貸價格にて納税せば、如何に林氏の富を以てするも、とてもたまつたものではあ

るまいと思はるゝ。

庭内には數百年の老榕樹がある。上には陸橋があり、その下にはトンネルがある。汲古書屋、觀稼樓、舞臺、來青閣、定靜堂など、其の廻廊を繋りて、相連つてゐる。予等は定靜堂にて茶を喫し、題名簿に左の二句を書した。

故國依然喬木在。典刑復見老成人。

接伴役の一人、許君は首肯して、其場所と其人とに適切なるを嘆賞した。此れは申す迄もなく東坡先生の句である。

林氏は福建省の人、福建即ち閩には林姓甚だ多し。政治家には林則徐あり、詩人には林佶あり、文學批評家には林西仲あり。其他予の知る林姓十指を屈するに違あらず。此處の林氏は福建省漳州府の奥地から、林應寅始めて臺灣に來り、其子平侯は十八にして臺灣に渡り、米とか鹽とか、數々の物を商ひ、一代にて數百

萬の富豪となつた。此れが有名なる林本源家の始祖だ。其の本源と家號したるは、飲水思源、其の本源を忘るゝ勿れの意味である。彼は衣食足りて、學問を愛し、書家呂西村、畫家謝瑄樵、文士葉東谷などを招聘し、此れが爲めに臺灣の文化に燦然として光を放つた。呂西村の漢隸などは、實に手に入つたもの。平侯の子が林維源で、此の時代が林氏の黄金時代、此の大庭園も、當時に築造せられたと聞く。

* * * * *

予は餘計なる事ながら、斯く考へた。とても此儘にては荒廢するの外はあるまい。何とか總督府にて之を買上げ、之を保存して、博物館の別館として使用したらば、所謂臺灣の古蹟保存としても、頗る妙ではあるまい乎。歴史乏しき臺灣には、此丈のものを、此儘荒廢せしむるは、何となく残り惜しく思はるゝ。

四二 淡水に向ふ

林氏邸を辭し、板橋から臺北へ引き返し、一路淡水に向うた。案内者には舊淡水郡守、現文教局員鈴木氏を伴うた。淡水港は、臺北の北十三哩、淡水河口に在り、從來は中部の鹿港、南部の安平と共に三大要港たり。而して更らに其の以前に湖れば安平と共に、和蘭人の占居したる二大要港であつたが、今は河口沙に埋められ、大船の出入が甚だ難く、戎克貿易衰へて、汽船貿易行はるゝ時代には、殆んど日一日とさびれ行くばかりの傾向だ。

* * * * *

淡水街の入口にて、荒木郡守に迎へられ、相伴うて先づゴルフ場に赴く。面積實に七萬坪、一帯の高丘を占め、眺望絶佳の由なれども、雲霧濛々、雨點さへ降りかゝりつゝあり。鈴木、荒木舊新の郡守、何れも我事の様に、懊惱してゐた。

轉じて劉銘傳の築地したる舊砲臺を見、更らに即今英國領事館となりつゝ、ある紅毛城を見た。此れは安平の赤崁城と、全く其趣を一にしてゐる。蘭人占居以前には、西班牙人の據りたる、『サン・ドミニヨ城』の遺址とも云ふ。果して然る乎、否乎。

此れから丘陵を歩いて公會堂に至つた。前に淡水河を控へ、洲沙、風帆、烟霧の中に出没す。前の觀音山や、背の大屯山が其姿を没したるを、案内役の舊新兩郡守は口惜しがつたが、予は此にて満足した。丘陵には、董や、蒲公英が、今を盛りと咲いてゐた。西洋人の子供達が、野花を集めてゐた。六十年來の貿易港であつた面影は、丘陵一帯を占むる西洋館が之を語りてゐる。

公會堂では荒木郡守及び夫人の肝煎にて、官民有志及び予等の同縣人の諸氏と會

食した。此地は鱸や黒鯛が名物とて、刺身の新鮮には敬服した。蛤も内地から移植したとて、其の吸物を供せられた。但し折角好成绩であつたが、餘りに亂暴に取り盡して、今や再び種切れとなる虞がありと聞いた。諸君から頻りに公會堂の額をとの注文にて、予は『江山如畫裡』と書いた。實は江城如畫裡の句を故らに斯く改めたのだ。而して荒木郡守の需に應じて、

寄語風流老郡守。官遊占斷此江山。
の二句を書した。郡守の官舎は、淡水河口に臨み、眞に好別莊である。荒木郡守は郡守中の長老である。老字を冠するも、不足はあるまい。

四三 草山雅集

淡水を去る時、荒木郡守から、贈られたる蜜柑を袖にし、自動車中にて喫しつゝ、北投に至つた。此處は臺北を距る三里、汽車の便がある。此れは清朝の光緒二十